海と毛布—粟津潔の写真について
Sea and Blanket – The Photographs of Awazu Kiyoshi

写真は、事物を写す。写したネガをポジとして印画紙に映す。映画は、撮影するといい、同じように、スクリーンに上映する。スケッチするというのは、本来、事物を見ながら描写する。デッサンするというのも広義には同様である。写したものを映すことと、事物を直接写すことでは、方法や表現されたメディアはちがうが、共通性をもっている。トレスするということがある。ひとの描いた絵なり、図面なりをできるだけ正確に写しとることである。[中略]

現代は写し映し、うつす(コピーとトレス)時代であって、オリジナルとコピーという二元論では、事物という対象をとらえることができない。私の作品の多くも、印刷とか、複製とか、くり返して同一方法、同一表現をくわだててきた仕事である。「複複製に進路をとれ!」で、やってきた。古い言葉では、「変化とバリエーション」である。同じ方法なり表現を、くり返しくり返しして多くの分子を生んでゆくことであるらしい。デザインする時は、あまり意識的にそうするわけではないが、結果としてそうなるのだ。むしろ、無意識のうちにそうなるのである。であるから、いっそう本質的なのかもしれない。

「おさい権三」のポスター・イラストレーションは、国貞の作品、「春画」、「閨房画」とよばれる浮世絵版画の作品の部分をトレスしたものである。私の仕事は、「写」しなのであり、それに色々な色を付与してみたのであり、「おさい権三」という近松作品の現代劇化のためのポスターに、仕上げたということである。「にごりえ」は、花札カルタを拡大しただけで終り、始まった。

粟津潔「写し」『造形思考ノート』(河出書房新社、1975年)より

Reprint

「海と毛布」展出品作品
the work of the exhibition “Umit to Mofu”
神奈川県川崎市 / 生田（部分）
Kawasaki, Kanagawa / Ikuta (detail)
昭和50年ごろ｜c.1975

12

粟津潔、マクリヒロゲル4

海と毛布——粟津潔の写真について

Awazu Kiyoshi: Makurihirogeru(EXPOSE)4

Sea and Blanket – The Photographs of Awazu Kiyoshi

「粟津潔、マクリヒロゲル」シリーズについて

金沢21世紀美術館は、2006年から2007年にかけて粟津デザイン室から約3000件の粟津潔の作品・資料を受贈しました。そして2014年から「粟津潔、マクリヒロゲル」シリーズをスタート。本シリーズは5年間かけて、これらの作品・資料の継続的な調査から、多角的な切り口で粟津潔の世界を紹介するシリーズです。2014年度は「美術が野を走る：粟津潔とパフォーマンス」、2015年度は「グラフィックからビジュアルへ：粟津潔の視覚伝達論」、2016年度は「粟津潔と建築」をテーマに開催されました。4回目となる2017年度は「海と毛布—粟津潔の写真について」を開催いたしました。

About “Awazu Kiyoshi, Makurihirogeru (EXPOSE)” Series

21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa has been gifted almost 3,000 items of works and materials of Awazu Kiyoshi (1929-2009) and has started the ”Awazu Kiyoshi, Makurihirogeru(EXPOSE)” series since2014. This series aims at introducing the world of Awazu from multiple perspectives as results of continuous survey and study of the contents. The exhibition “Art Running Wild: Awazu Kiyoshi and performance” was held in 2014, followed by the exbhition “From Graphic to Visual: Awazu Kiyoshi’s Theory on Visual Communication” in 2015, “Awazu Kiyoshi and Architecture” in 2016, and “Sea and Blanket – The Photographs of Awazu Kiyoshi ” was held in 2017 as the forth of the series.

Contents

4 展覧会ドキュメント

Document of the exhibition “Sea and Blanket – The Photographs of Awazu Kiyoshi”

–

18 粟津潔の写真について｜高橋律子

25 Awazu Kiyoshi and Photography｜ TAKAHASHI Ritsuko

–

31 粟津潔｜写真作品リスト

Awazu Kiyoshi｜List of Photographic Works

服
茶店

1959 津軽への旅

Journey to Tsugaru

1959(昭和34)年3月　津軽への旅

雑誌『室内』(1965年4月号)誌面に寄稿された「津軽」という文章に、この旅の記憶が語られている。25歳頃、太宰治の『津軽』に感銘を受けた粟津は、それ以来、太宰の小説を読み尽くし、30歳となった1959年3月、「地方の人間生活のフォト・ドキュメント」を撮るため津軽へと旅立つ。粟津にとってこの旅は、写真と真摯に向き合う端緒となった。「津軽」は、『粟津潔デザイン図絵』(田畑書店、1970年)に転載され、撮影された写真も初めて掲載された。しかし、10年以上経て編集された記録は、本人も「随分以前のことだから記憶が確かではない」と述べるように、信頼性に欠くものであった。今回の調査では、画面に写された客観的な情報を手がかりに、1点1点について撮影場所、撮影年を特定していった。

March 1959: Journey to Tsugaru

In the essay “Tsugaru” published in the magazine Shitsunai (Interior) in April 1965, Awazu explains that he was captivated by DAZAI Osamu’s novel *Tsugaru* and headed for Tsugaru with the intention of producing a “photo document of the people of the region.” This essay was reprinted in *Awazu Kiyoshi dezain zue (Illustrated designs of Awazu Kiyoshi)* (1970) where it was accompanied by the photographs. However, as indicated by Awazu himself when he noted, “It was a long time ago so my memory is hazy,” this record compiled some ten years after the event contained numerous inconsistencies and lacked reliability. This latest survey involved identifying the location and year each individual photograph was taken using as clues the objective information contained within the photographs themselves.

展示作品リスト｜List of Works

※各写真にはタイトルではなく、撮影場所と写された対象のキーワードをキャプションとして示した。

津軽への旅　Journey to Tsugaru

Ph-0954
青森県 / 龍飛崎
Aomori / Cape Tappi
1959｜23.7×30.4cm
ゼラチン・シルバープリント
–

Ph-0799
青森県 / 青函連絡船青森駅待合室｜ Aomori / Waiting room for the Aomori-Hakodate ferry at Aomori Station ｜1959
24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント
–

Ph-0947
青森県 / 青森駅｜ Aomori / Aomori Station ｜1959
24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント
–

Ph-0850
不詳（行商の女性たち）｜ The location under research
1959｜24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント
–

Ph-0944
不詳（行商の女性たち）｜ The location under research ｜
1959｜24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント

Ph-0890
青森県弘前市 / 弘前駅前郵便局｜ Post Office in front of Hirosaki Station ｜1959
24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント
–

Ph-0861
青森県弘前市 / 弘前駅前、東急観光と多古八｜ Hirosaki, Aomori / In front of Hirosaki Station, Takohachi and Tokyu Tourist Corporation
1959｜24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント
–

Ph-0945
青森県弘前市｜ Hirosaki, Aomori ｜1959
24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント
–

Ph-0806
青森県弘前市｜ Hirosaki, Aomori ｜1959
24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント
–

Ph-0945
青森県弘前市 / トテ馬車｜ Hirosaki, Aomori / Horse carriage ｜1959｜24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント

Ph-0851
青森県弘前市 / 菊地薬局｜ Dotemachi, Hirosaki, Aomori / Kikuchi Pharmacy
1959｜24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント
–

Ph-0811
青森県弘前市 / レストランさやま｜ Dotemachi, Hirosaki, Aomori / Restaurant Sayama
1959｜24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント
–

Ph-0896
青森県弘前市 / 弘前市消防団｜ Dotemachi, Hirosaki, Aomori / Hirosaki Fire Brigade ｜1959
24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント
–

Ph-0886
青森県黒石市｜ Kuroishi, Aomori ｜1959
24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント
–

Ph-0892
青森県黒石市 / こけし店｜ Kuroishi / Kokeshi store
1959｜24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント

Ph-0954

Ph-0896

津軽への旅以降　After Journey to Tsugaru

Ph-0849
東京都 / 上野公園、上野松竹劇場入場口｜ Tokyo / Ueno Park, Entrance to Ueno Shochiku Theater
1960s ｜24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント
–

Ph-0845
東京都 / 上野公園、上野松竹劇場入場口｜ Tokyo / Ueno Park, Entrance to Ueno Shochiku Theater
1960s ｜24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント
–

Ph-0781
カリフォルニア州オークランド（アメリカ）/ グランド・レイク・シアター｜ Oakland, California, USA / Grand Lake Theatre
1978｜24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント

Ph-0787
アメリカ / GUTLESS HUNTOON｜ USA / GUTLESS HUNTOON
1978｜24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント
–

Ph-0775
アメリカ / Korbetes 広告｜ USA / Korvettes advtisement
1978｜24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント
–

Ph-0985
滋賀県 / 墓地｜ Shiga / Graveyard ｜1970
24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント
–

Ph-0986
滋賀県 / 墓地｜ Shiga / Graveyard ｜1970
24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント

Ph-0980
滋賀県 / 木之本通り｜ Shiga / Kinomoto-dori ｜1970
24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント
–

Ph-0963
新潟県長岡市 / 長映看板｜ Nagaoka, Niigata / Choei billboard ｜1970
24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント
–

Ph-0894
近鉄モ200形｜ Series 200 Kintetsu train ｜1960s
24.5×16.5cm
ゼラチン・シルバープリント

Ph-0985

1979 海と毛布
Sea and Blanket

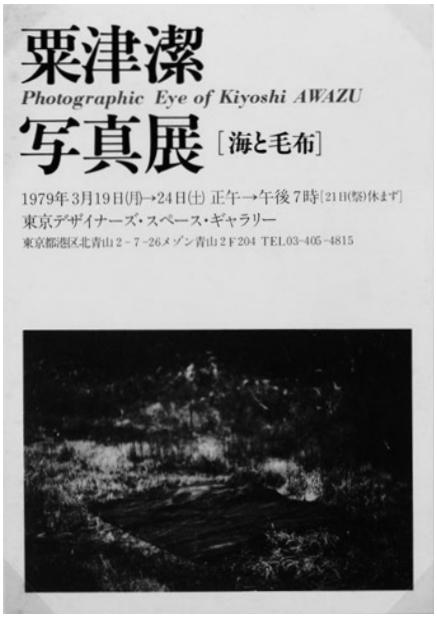
1979 "Umi to mofu" (Sea and blanket)
— Photographic Eye of Kiyoshi Awaya

1979(昭和54)年　「海と毛布―粟津潔写真展」

今回の調査により粟津が生前一度だけ開催した写真展「海と毛布」展についての詳細が明らかとなった。当時、粟津デザイン室のアシスタントをしていたデザイナー川村易によれば、写真展を開催するにあたり、よく遊びに来ていた写真家の山崎博とふたりで、粟津が撮りためていた写真をまとめて現像したようだ。「海と毛布」展では、自筆サインのある草むらの写真、海の写真、そしてデザイン作品を楽しみにしている人のために粟津の代表作も数点展示していたとのことである。津軽の旅から20年を経て、粟津の写真に対する態度の大きな変化が見られる。粟津は、現代美術の流れにある写真の動向を敏感に受容するとともに、若い山崎が撮るコンセプチャルな写真への共鳴も感じていたのではないか。

1979: “Umi to mofu” (Sea and blanket) – Photographic Eye of Kiyoshi Awazu

As a result of this latest survey the details of the exhibition “Umi to mofu” were confirmed. Designer KAWAMURA Osamu, who was the assistant staff of AWAZU Design Office, recalled the event that it seems he developed together with photographer YAMAZAKI Hiroshi, who often visited the office, a number of photographs Awazu had taken for the exhibition. According to Kawamura, the photographs of bushes and the sea were displayed at the exhibition. In addition, a number of representative works by Awazu were displayed for people who were expecting to see some of his design works. Twenty years after that trip to Tsugaru, Awazu’s attitude towards photography was also changing, and while one can sense the influence of various photographers of different periods, in the case of the “Umi to mofu” exhibition the influence of Yamazaki, who in the 1970s produced a series of conceptual photographs of coastlines, might be particularly strong.



「海と毛布―粟津潔写真展」案内状

Ph-0751

（海と毛布｜ Sea and blanket）

（海と毛布｜ Sea and blanket）

展示作品リスト｜List of Works

「海と毛布―粟津潔写真展」案内状
1979｜粟津デザイン室蔵
–
Ph-0748
神奈川県川崎市 / 生田｜ Kawasaki, Kanagawa / Ikuta
c.1975｜40.6×50.4cm ｜ゼラチン・シルバープリント
–
Ph-0952
神奈川県川崎市 / 生田｜ Kawasaki, Kanagawa / Ikuta
c.1975｜40.6×50.4cm ｜ゼラチン・シルバープリント
–
Ph-0751
神奈川県川崎市 / 生田｜ Kawasaki, Kanagawa / Ikuta
c.1975｜40.6×50.4cm ｜ゼラチン・シルバープリント
–
（海と毛布｜ Sea and blanket）
神奈川県川崎市 / 生田｜ Kawasaki, Kanagawa / Ikuta
c.1975｜40.6×50.4cm ｜ゼラチン・シルバープリント｜粟津デザイン室蔵
–
（海と毛布｜ Sea and blanket）
神奈川県川崎市 / 生田｜ Kawasaki, Kanagawa / Ikuta
c.1975｜40.6×50.4cm ｜ゼラチン・シルバープリント｜粟津デザイン室蔵

DER GOTT DER HUNDE
犬
神
DER GOTT DER HUNDE
犬
神
東京展
TOKYO

アへの旅の追憶
にごりえ
おさい権三

写真とモンタージュ

粟津は、古い写真集や雑誌等から切り抜いた写真からモンタージュした作品も多く手がけている。粟津によれば、写真は、事実をうち消して、生きているものを事物という凝固へと運ぶ。モンタージュは事物化されたイメージを再び事物化へ向ける作業であり、写真に写されているのが何かを問う以上に、自分が写真に何を見るかが重要だとする。今回の調査は、粟津が写した「事実」を追跡する試みで、粟津の写真に対する態度とは相反するものであった。しかし、客観的な視線が際立つモンタージュ作品と、粟津自身が撮影した写真作品を比較すると、粟津は自己の写真においては完全なる事物化はなしえなかったように思われる。だが、粟津の写真作品には他の作品以上に対象に対する真っ直ぐな眼差しがあり、粟津が「何を見たか」がそこにリアルに表れている。

Photography and montage

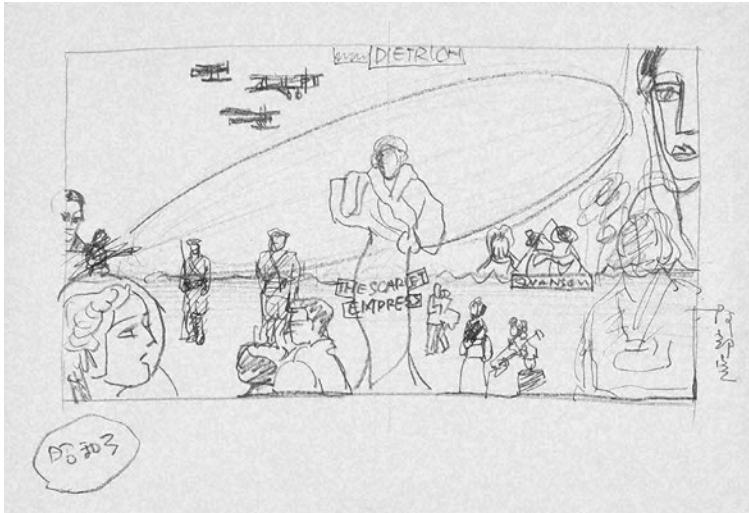
Awazu actively used photographic media, producing montages from old photo albums, magazines and so on. The aim of photography was not to capture images of things but “to negate reality and channel living things towards solidification as objects,” while montage was “the act of appropriating objectified images for further objectification.” For Awazu, more important than asking what is captured in a photograph is asking what one sees in a photograph. This latest survey involved tracking down the “reality” that Awazu photographed, in which sense it contradicted Awazu’s approach to photography. When we compare his montage works, in which an objective point of view is conspicuous, and the photographic works he shot himself, the difference between them stands out. Awazu do not use the photographs he took himself in his montages. Consequently, however, it is more in his photographs than his other works that Awazu’s straight point of view finds expression.

Po-130
にごりえ / 東横劇場 / 文学座
NIGORIE, Muddy Water / BUNGAKUZA
1971｜ B2｜オフセット / 紙
–
Po-145-B1
おさい権三 / 国立劇場大劇場 / 文学座
Osai and Gonza / BUNGAKUZA
1973｜ B2｜オフセット / 紙
–
Po-026
リトアニアへの旅の追憶 / フィルムアート社
Reminiscence of a Journey to Liyhuania / Filmart-sha Co.,Ltd
1973｜ B2｜オフセット / 紙
–
Po-170
第1回東京展 / 参加出品受付 / ＜東京展＞市民会議
TOKYO ART FESTIVAL 1975
1975｜ B2｜オフセット / 紙
–
Po-018
犬神 / DER GOTTO DER HUNDE / Theater am Tum / TeNJOSAJiki
INUGAMI / TeNJOSAJiki
1969｜ B1｜シルクスクリーン / 紙
Po-017
犬神 / 草月会館ホール / 劇団天井桟敷
INUGAMI / TeNJOSAJiki
1969｜ B1｜シルクスクリーン / 紙

Ip-0530
「リトアニアへの旅の追憶」ポスター版下原稿
A picture for the poster of Reminiscence of a Journey to Liyhuania
1973
–
Ip-0646
「第1回東京展」ポスター版下原稿
A picture for the poster of TOKYO ART FESTIVAL 1975
1975
–
Ip-0516
（不詳｜ title and year under research）
–
Ip-0517
（不詳｜ title and year under research）
–
Ip-0543
（不詳｜ title and year under research）

Ip-0516（不詳｜ title and year under research）

Ip-0517（不詳｜ title and year under research）



Ip-0543（不詳｜ title and year under research）

粟津潔の写真について

高橋律子

はじめに

油彩やドローイング、彫刻など多彩な表現を試みてきた粟津潔が写真作品を手がけていたことはあまり知られていない。金沢21世紀美術館では粟津の写真作品266点を所蔵しており、所蔵の粟津コレクション全2,939件（2018年3月現在）の約1割を占める。2007年 -2008年当館で開催した「荒野のグラフィズム：粟津潔展」にて写真作品全点展示公開、その後調査を進め、2012年発行の『粟津潔、マクリヒロゲル　金沢21世紀美術館コレクション・カタログ』収録のDVD1「コレクション・データ」には、写真作品82点に作品名を加えた全266点のデータを掲載した。粟津の写真に関する先行研究としては、深川雅文「粟津の『写真』の位相」[*1]がある。

粟津潔が撮影した写真をすべて「写真作品」として取り扱うべきかどうか、判断が難しい。旅のスナップとも解釈可能な写真もある。例えば、**Ph-0972**は、同行した映画監督の篠田正浩が、「天の橋立」で有名な「股のぞき」をしている写真であり、旅の思い出を写した1枚と見ることもできる。しかし、この写真を自著『粟津潔デザイン図絵』（田畑書店、1970年、p.56）で大きく1頁で掲載していることを鑑みると、これは「作品」と位置づけるべきだろう。

撮影した時の「作品」としての意識は、粟津にとってそれほど重要ではないようだ。粟津は写真について、「写真は事物を写し撮るとあるが、逆である。事実を打ち消して、生きているものを事物という凝固へ運んでしまう」といい、そして、「一枚一枚の写真に、私が何を見るか。」だという[*2]。つまり、粟津にとっての写真は、たとえ自分が撮影した写真であっても、それらを再び眺めるときの自分が「何を見たか」が重要だということである。まずは粟津の写真作品全体、そして1点1点を等しく「見る」ことから始めることとする。

本稿では、第1に撮影時に粟津潔の眼が何を見たのかということと、第2に粟津自身が撮影した写真をどのように見たかの2つの視点を意識し、**1. 写真作品のイメージ分析**では、可能な限り各写真の撮影年および撮影場所を確定することを試みた。**2. 個展「海と毛布—粟津潔写真展」**では、第2の視点を明らかにするため、深川の調査で判明した1978年から79年頃に開催されたという粟津潔の写真個展について調査を行った。

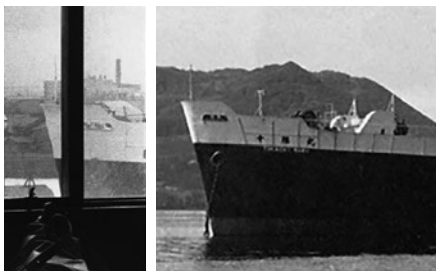
※粟津潔の写真作品については
31頁からの「粟津潔｜写真作品リスト」を参照のこと。

1. 写真作品のイメージ分析

粟津潔の写真作品が掲載された著作として、『粟津潔デザイン図絵』(田畑書店、1970年)(以下、『デザイン図絵』)と『粟津潔 造型思考ノート』(河出書房新社、1975年)(以下、『造型思考ノート』)が挙げられる。『デザイン図絵』では撮影者名が巻末の「作品・図版解説」に記載されているため、粟津の写真作品を特定することができる。一方、『造形思考ノート』では、撮影者の情報は、6頁に「写真＝山崎博・渋川育由・粟津潔」と3人の名前がまとめて記載されているのみで、個別の写真の撮影者を特定することができない。他、『デザインの発見』(三一書房、1966年)は、各項目に写真画像が挿図として掲載されているが、撮影者の情報がなく調査対象とすることはできなかった。上記の理由から、当館所蔵作品のタイトルは主に『デザイン図絵』を参照し付与された*3。

しかし、調査の過程で、『デザイン図絵』に掲載された写真作品の情報の信頼性が低いことがわかってきた。『デザイン図絵』に収録された「津軽」という文章には「昭和三十七年三月粟津撮影」と添えられているものの、巻末の「作品・図版目録」には「1957-3」、つまり昭和32年3月の撮影とあり、1冊の本のなかで制作年表記のブレが5年あることになる。また、「写真・秋田駅前」(**Ph-0945**)と題された写真には馬車が写されているが、1961(昭和36)年には近代化を象徴する「民衆駅」へと改築が進められた秋田駅周辺には、その頃すでに馬車はほとんど走っていなかった*4。馬車の形状が青森県弘前市内で数台残っていた「トテ馬車」*5と似ていることから[**図1**]、弘前で撮影されたのではないかと推測している。「秋田駅待合室」の写真についても、調査中ではあるが、秋田駅の可能性は低い*6。情報の齟齬については粟津の写真観も大いに関わっており、それについては後述するが、客観的な情報源として『デザイン図絵』は適切でないと判断した。そのため、今回の調査では、写真に写された情報から、客観的に撮影場所、撮影年を特定していく方法を採用した。

[**図1**] 弘前駅前のトテ馬車:『弘前・黒石・平川の昭和』(いき出版、2014年)より(部分)



[**図2**] 左の画像:Ph-0799(部分) 右の画像(部分):十勝丸「【映像資料】青函連絡線最後の蒸気船　十勝丸の運行」より https://blogs.yahoo.co.jp/sdrm65/35475929.html (最終アクセス:2018年3月13日)

■ 津軽(1959年3月)

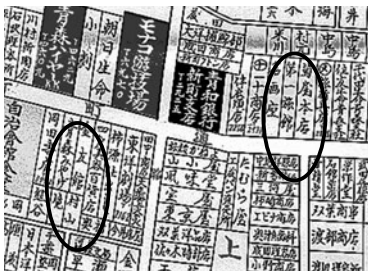
『デザイン図絵』に掲載された「津軽」の写真と情報を手掛かりに、筆者は青森県の津軽地方の現地調査を行った(2017年3月)。昭和30年代と現在では風景が様変わりしており、現状の風景から推察することはできなかったが、複数の図書館で当時の郷土関連資料を見せていただくことによって多くの情報を入手することができた。粟津の「津軽」の写真について、2017年7月7日から12月20日にかけて当館ウェブサイトにて広く情報を呼びかけたが新規の情報は得られなかった。以下は筆者独自の調査によるものである。

Ph-0799:青森駅

青森の郷土史家から、左手に見える船が青函連絡船をひくタグボートだとの指摘を受ける。右手の船の形状から、青函連絡船にて1970年頃まで運行していた「十勝丸」と確認 *7。[**図2**]

Ph-0947:青森駅

女性の頭部に巻かれた手ぬぐいに「弘前」の文字があり、青森付近ではないかと推定。『青森市々街案内地図』(中央出版社札幌支社、1957年3月現在)に、左手看板に書かれる「田子旅館」「第一旅館」「金友旅館」を確認することができた。[**図3**]



[**図3**] 青森駅前の地図(部分):『青森市々街案内地図』(中央出版社札幌支社、1957年3月現在)より ※丸囲みは筆者。

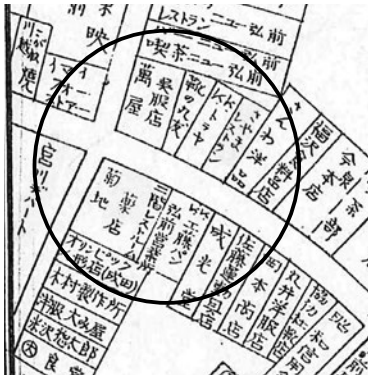
Ph-0861:弘前駅前

『弘前市住宅明細図』(1961年)に「東急観光案内所」と「たこ八寿し」を並びで確認。[**図4**]

[**図4**] 弘前駅前の地図(部分)『弘前市住宅明細図』(1961年)より ※丸囲みは筆者。

Ph-0945:弘前付近か?

トテ馬車の形状から弘前付近と推定。トテ馬車に吊るされた映画ポスターは「人間の條件」(1959年



［**図5**］弘前駅前の地図（部分）『弘前市住宅明細図』（1961年）より ※丸囲みは筆者。

［**図6**］かくは宮川デパート：陸奥新報「まちなかの公衆電話やら」（2014年11月20日）より ※丸囲みは筆者。

［**図7**］陸奥新報「まちなかの公衆電話やら」（2014年11月20日）より

［**図8**］えんつここけし：「青森県地場セレクト ブログ－青森県観光物産館アスパム直営店」より http://jibaselect.blog10.fc2.com/blog-date-201112.html（最終アクセス：2018年3月13日）

1月15日公開）と「大学の合唱」（同年1月14日公開）の二本立て。ヒアリングさせていただいた郷土史家によれば、弘前市内の映画は都心部よりも1ヶ月ほど遅れて上映されていたとのことなので、1959年3月に撮影されたとする仮説ともほぼ合致する。

Ph-0806：弘前市内

左の電信柱に貼られた広告に「弘前家庭料理教室」「白金ドレスメーカー女学院」と書かれている。弘前市内中心部と推定される。

Ph-0851：弘前市内（土手町）

「薬店」と「TEL36」の文字から、当時の電話番号を照合したところ、弘前市内土手町の菊地薬局であることが確認された。

Ph-0811：弘前市内（土手町）

『弘前市住宅明細図』（1961年）より菊地薬局向かいに「さやまレストラン」を確認。［**図5**］

Ph-0801：弘前市内

電柱に貼られた映画のポスター「荷車の歌」の封切は1959年2月。電柱後ろの立て看板に福引の日程が「3月10日～4月2●日（●は読み取り不能）」とある。福引場所は富士銀行横（地図上では数件離れているが）弘前良店会事務所。1959年3月の撮影とする仮説ともほぼ合致する。

Ph-0896：弘前市内（土手町）

弘前市消防団の法被を身につける男性たち。左手に見える電話ボックスから弘前市内土手町にあった「かくは宮川デパート」前であることを確認できた*8［**図6**］。デパートの入り口前には犬の毛皮売りの男性がおり、佐々木直亮氏の写真［**図7**］にも、同じ場所で犬の毛皮売りをする行商人の姿が写されている。

Ph-0886：黒石市内

立て看板に「鳴海共立信用組合温湯支店」「黒石信用金庫山形支店提携」とあり、青森県黒石市付近と推定される。映画看板には「恐怖の対決」（1958年7月20日公開）、「一心太助 天下の一大事」（1958年10月22日公開）ほか1本の3本立てとなっている。弘前よりも小規模都市の黒石での上映は、さらに遅れていた可能性がある。1959年3月撮影と推測。

Ph-0892：黒石市内

黒石市名産の「えんつここけし」が多数並んだこけし店。「えんつここけし」は赤ちゃんがカゴに入った姿を表した下部が丸い特徴的な形をしている［**図8**］。上部のカレンダーに「青森」の文字が読みとれる。

■アメリカ、カリフォルニア州オークランド（1978年12月）

Ph-0781：GRAND LAKE THEATRE

画面右下のベンチに書かれる「Colonial Donuts 3318 LAKESHORE AVE.」の地名を検索した結果、アメリカのカリフォルニア州オークランドに同名のドーナツ店が現存しているらしいことが確認できた。同地域にあるGRAND LAKE THEATREも合わせて確認できた*9。上映されている「PINOCCHIO」のポスターより映画「ピノキオ」（1978年12月公開）のと照合することができたことから撮影年を推定［**図9**］。**Ph-0775**の画像についても、クリスマスセールの広告であることから、12月に撮影された写真と推定され、同時期の写真と考えられる。

■琵琶湖・余呉湖・新潟県長岡市（1970年）

粟津潔は『デザイン図絵』にて、「今年の春、二度にわけて半月ほど旅をした。はじめは飛騨の高山

から琵琶湖周辺の村々。それから舞鶴を通って、城崎の方まで行ってみた。映画監督の篠田正浩といっしょだった。始めは二人で映画を創るつもりのロケハンだったが、シナリオも映画を創ることも、結果としてしなかったので、やはり旅をしたということだ。」[*10]と述べている。

Ph-0985、0986：琵琶湖か余呉湖周辺

琵琶湖や余呉湖周辺では、1970年代も土葬が行われていたそうで、盛り上がった土は土葬の墓である。この地域では葬式で飾られたものが墓前まで運ばれたのだという[*11]。昭和45年2月27日亡と記され、墓前には供えられた牛乳瓶や観覧車のおもちゃがまだきれいな状態であることが白黒写真からも見て取れる。『デザイン図絵』発行が1970年10月5日であり、その年の春に撮影された写真だろう。

Ph-0963、0964：長岡市内

「長映」とあるのは長岡市内にあった映画館。「任侠興亡史　組長と代貸」(1970年2月21日公開)、「経験」(1969年10月18日公開)などの上映時期から1970年の撮影と考えられる。

■東京、上野(撮影年不明)

Ph-0849、Ph-0805：上野公園

奥に1953年に開業の上野松竹劇場入場口が確認できる。[**図10**]

[**図9**] 左の画像：Ph-0781(部分) 右の画像：ピノキオのポスター Pixie Dust Pastiche http://pixiedustpastiche.blogspot.jp/2014/01/pinocchio-release-dates-and-posters.html より(最終アクセス：2018年3月13日)

[**図10**] 上野松竹劇場入口：「ぼくの近代建築コレクション 上野松竹デパート／上野公園　2015年9月5日」より https://blogimg.goo.ne.jp/user_image/2c/44/75ee050ffe217ed49969c9802826816b.jpg（最終アクセス：2018年3月13日）

2. 個展「海と毛布—粟津潔写真展」

深川による関係者調査で、粟津潔が1978年から1979年にかけて「東京デザイナーズ・スペース」にて写真展を行っていたことが判明したが、今回の調査で、新たにこの展覧会の案内状を確認することができ、粟津潔写真展の詳細が明らかとなった。
案内状に記載されている情報は以下である。[**図11**]

展覧会名：海と毛布—粟津潔写真展
会期：1979年3月19日 -24日(土)
会場：東京デザイナーズ・スペース

メインビジュアルには当館所蔵 **Ph-0751**が使用されている。草むらのなかに置かれた毛布らしきものの画像である。展覧会場となった「東京デザイナーズ・スペース」は、東京都青山に1976年に開設された、デザイナーたちが自主的に運営するギャラリーで[*12]、1981年に六本木の AXIS ビルに移設し1995年に解散した。日本のデザイン史の70年代を語る上で重要なこのギャラリーは、田中一光ら「個人的表現、実験的表現の新しい発表の場」を求めるデザイナーたちが設立準備委員会を作り、100名のデザイナーに声かけし、92名が参加して立ち上げあげられた。立ち上げの企画は「ONE DAY ONE SHOW」。会員全員が一日限りの展覧会を開催するという破天荒な企画で、毎日オープニング・パーティといった狂騒であったが、それがかえってデザイナーたちを団結させ、

[**図11**]「海と毛布—粟津潔写真展」　案内状

交流の場となっていったようだ。粟津潔はこの立ち上げの「ONE DAY ONE SHOW」で、青葉益輝、浅葉克己の次の3日目に展覧会を開いている。1979年3月12日から今度は一人一週間ずつの「ONE WEEK ONE SHOW」の企画が始まる。粟津潔は、青葉益輝の次の第2弾展覧会を担当し、「海と毛布―粟津潔写真展」を開催する。

展覧会の様子について、当時アシスタントだった川村易氏にインタビュー調査をさせていただいた（2017年3月22日）。川村氏は、この展覧会にあわせて粟津デザイン室に出入りしていた山崎博とともに、粟津が撮りためていた写真を現像したという。どのような展示だったかを示す記録写真は残念ながら残されていないが、展示の様子について川村氏がイラスト・メモを描いてくれた。［**図12**］「海と毛布」展では、自筆サインのある草むらの写真や海の写真を展示したが、入り口付近にはデザイン作品を楽しみにしている人のため、粟津の代表作ポスターを数点展示していたとのことである。

肉筆のサインが入れられた「草むら」5点がおそらくこの写真展に展示されたのではないかと推測される。展覧会開催は1979年であるが、『粟津潔 造形思考ノート』に「草むら」の写真1点が収録されていることから、1975年以前の撮影だと考えられる。

全会員211名の五十音順で開催される「ONE WEEK ONE SHOW」で、「あ」から始まる粟津潔の順番は必然的に企画開始早々に回ってくる。第2弾展覧会として開催されたこの「海と毛布」展は、趣向を凝らしたいという思いもあって、その時関心のあった写真の展覧会をしようと、直感的に実現したものではないだろうか。

この写真展についての情報は、本調査で明らかになるまでほぼ知られていなかった。1978年から79年2月にかけて全3巻発行された『粟津 潔・作品集』の年表に開催前の写真展の情報が掲載されていないのは当然だとしても、すでに撮りためてあったはずの写真作品も収録されていない。一方映画については、「実験映画と個人映画」（第3巻、106頁）という文章も書き下ろし、年表では1974年に開催された「映像個展」について記され、上映した映像プログラムの詳細にまで触れている。1989年発行の『粟津 潔の仕事 1949-1989』の巻末の年表には、1974年の映像個展も1979年の写真個展も触れられていないが、映画美術や映像デザインの頁はあるものの写真作品は掲載されていない。5頁の「1949-1989 私の仕事」という文章でも、「私は、絵やグラフィック・デザインの仕事をふりだしに、映画・美術・舞台美術・個人映画製作・壁画工作・彫刻の仕事や版画製作のほか、デザインやアートに関するエッセイなど数冊の本を書き、一度だけ「東京三文おぺれった」という芝居の台本を書いた。」*13とあり、1975年の『造型思考ノート』で書かれていた「デザインすること。イラストレーションすること。映画を作ること。舞台、映画美術の仕事をすること。**写真を撮ること**。建築に関わる仕事。ディスプレイや壁画を作ること。一冊の本を装幀すること。文章を書くこと。これらすべては私の仕事である。」*14から「写真を撮ること」だけがすっぽりと抜け落ちる。これほどまでに粟津自身の関心から写真が抜け落ちた原因に山崎博の存在があるのではないかと考えている。「海と毛布」展に出品された直筆サイン入りの「草むら」の写真は、当館所蔵の写真作品の中でも、抽象的な画面構成以上に、草むらの奥行きを感じさせるモノトーンの色彩が印象

［**図12**］インタビュー後（2017年3月22日）に川村易が記憶をもとに描いた「うろ覚え東京デザイナー・スペース」

的な秀作である。技術的にも完成度が高いこの写真の現像を手がけたのは、すでに写真家としての地位を確立しつつあった山崎だろう。粟津は、早くから写真家としての山崎の才能を信頼し、粟津の著作に掲載される写真の多くを山崎に任せてきた。1980年代以降、山崎は写真家として評価を得て、独自の道を歩み始める *15。まさにこのタイミングで粟津の写真への興味が急速に薄れていくのは、山崎との交流が少なくなっていくことと無縁ではないだろう。

おわりに　粟津潔にとっての写真とは

深川は、粟津の写真作品の「作品」としての位置づけを試みているが、結論が出たとは言い難い。今回の調査では、少なくとも、粟津潔における「写真」とは何か、その輪郭は見えてきた。粟津潔は写真について、次のように述べる。

> Photography を写真と訳したのは、大いなる誤りであるのだが、それは真実を写すという意に解されているからだ。写真というメカニズムは、世界の表層を、もう一つの表層、皮膜に移し替える作業であるから、写真は、「皮剥ぎ」と訳すべきであり、写真家は、「皮剥師」であろう *16。
>
> 写真は事実を写し撮るとあるが、逆である。事実を打ち消して、生きているものを事物という凝固へと運んでしまうのだ。そして、その時以来、ひとは記憶へ向かって走るのだ *17。

こうした粟津の写真観の根底にあるのは、粟津が1歳になる直前に事故死した父親の4枚の写真にあるのではないかと考えている *18［**図13**］。小学校5年生の頃、母親から初めて、「これがあなたの父親です」と父親の若い頃の4枚の写真を見せられたのが、父親との最初の出会いだと言う。

> ともかく、ぼくの父は、四枚の薄っぺらな印画紙の中にいるだけでした。そして、その印画紙の中で、微笑んでいる父と、メガネをかけたやさしい父。なんとも信じがたい、これは本当なのか、とを見るような思いで父を見たのでした。
> その写真を見た日から、ぼくの心の中に、父なるものが棲みつくようになったのです *19。

父親の写真から自分だけの父親像を作り出していることを客観視し、それを父親という真実ではなく、「事物化」された父親であると粟津は考える。古い雑誌や写真集に掲載された写真に対しても、粟津はそこに「事物」を見、粟津自身の手で「事物化」する作業、すなわちモンタージュする。
粟津は、「スケッチをする、**写真をとる**。これは事物を見ること」だと並列に述べる。粟津にとって、スケッチすることと、写真をとることは近い感覚にあり、「事物化」することは、その先にある「見ること」であり、ものを創り出すことなのではないか *20。
粟津の写真には、粟津自身の眼が何を見てきたかが生々しく反映されている。自分が撮影した写真を「見る」粟津は、写実を放棄し「事物化」していく。そう考えると『デザイン図絵』での撮影場所や撮

［**図13**］「父・粟津恵照　石川県七尾中学校の学生時代一九一七年四月」（粟津潔『不思議を目玉に入れて』現代企画室、2006年より）

影年の混乱も、粟津にとってはそういった真実はさほど重要でないからこそだと理解できる。粟津の写真に対する態度が見えてきたとき、「真実」を追究する調査を継続する意味があるのかという疑問もわいてきた。しかし同時に、「真実」に近づくことによって、粟津潔が何を見て、何を考え、ものを作ってきたのか理解することができた。粟津の制作態度を理解しつつも、出来うる限り客観的に作品を「見て」いくことこそがこの異形のデザイナーに近づく方法だと言えるのではないか。粟津潔の写真についての調査は今後も継続していく予定である。

［註］

*1 深川雅文「粟津潔の『写真』の位相」『複々製に進路をとれ 粟津潔60年の軌跡』川崎市民ミュージアム、2009年、pp.110-113

*2『粟津潔 造型思考ノート』河出書房出版、1975年、p. 32

*3 粟津潔が亡くなった後の発行だが、粟津潔・笹久保伸・青木大輔『すてたろう』（粟津ケン、2014年）に粟津デザイン室所蔵の粟津潔写真作品26点が収録されている。

*4「大正期に鉄道支線網が整備されたほかバス路線も広がると、乗合馬車は駆逐されました。」秋田県公文書館編『平成21年度 秋田県公文書館企画展「公文書館資料で見る近現代秋田の交通」パンフレット』、秋田県、p.3

*5「高度経済成長は早さと効率を重視する社会だった。このためバスやタクシーの普及に伴い、トテ馬車の利用客は減少。1958（昭和33）年には5台にまで減っていた。しかし、その希少性から馬車は恰好（かっこう）の被写体だった。」（陸奥新報ウェブサイト「変貌し続ける弘前駅前＝25」（2015年5月4日）www.mutusinpou.co.jp/ 津軽の街と風景 /2015/05/36229.html（最終アクセス：2018年3月13日）

*6 2017年3月24日に著者が電話にて、秋田市立中央図書館明徳館にレファレンスしたところ、論拠となる資料は見つけられなかったが、昭和30年代の秋田駅を知る複数の人たちへの聞き取りをしていただいた結果、秋田駅ではない可能性が高いとの報告があった。

*7「青函連絡船最後の蒸気船十勝丸。」（動画）https://www.youtube.com/watch?v=CXVB90jGGNk（最終アクセス：2018年3月13日）

*8 陸奥新報「まちなかの公衆電話やら」（2014年11月20日）
http://www.mutusinpou.co.jp/ まちネタ散歩！陸奥新報（続々）/2014/11/33970.html（最終アクセス：2018年3月13日）

*9「GRAND LAKE THEATRE」Web サイト http://www.renaissancerialto.com（最終アクセス：2018年3月13日）

*10 粟津潔『粟津潔デザイン図絵』田畑書店、1970年、p.38

*11 筆者による余呉駅職員へのヒアリングから（2018年1月31日）

*12 東京デザイナーズ・スペース記録集編集委員会編『東京デザイナーズ・スペース 1976-1995年 記録集』1999年

*13『粟津 潔の仕事　1949-1989』河出書房新社、1989年、p.5

*14『粟津潔 造型思考ノート』前掲書、p. 157

*15『山崎博　計画と偶然』（東京都写真美術館、2017年）、『山崎博「動く写真！　止まる映画 !!』（リクルート、2009年）を参照。

*16 粟津潔「0年の海景から」『粟津 潔・作品集 第1巻・イラストレーションとデザイン篇』講談社、1978年、p.196

*17 粟津潔「モンタージュ」『粟津潔　造形思考ノート』前掲書、p.32

*18 川添登も粟津の映像作品に対して、父親の写真からの影響を次のように指摘する。「粟津潔は、幼いときに父と死にわかれ、彼の記憶にある父は、写真のなかにいる父である。写真のなかで父は生きているが、実際は死んでおり、彼は、少年時代から写真のなかに、生とともに死をみつづけてきた。そして、そこに映像というもののもつ不思議さを感じとっていただろう。映像、それは幽霊のようなものなのだ。映像に、死を感じ、外部のすべてを環境化してしまうことは、ひとつの悲しい宿命だった。彼はあらゆる風景を、ヴィジュアル・デザイナーの目を通して、自らの環境にしてしまうが、その時、風景そのものは死ぬのである。」（川添登「粟津潔の環境デザイン」『粟津 潔・作品集 第3巻・環境デザインと絵画篇』講談社、1979年、p.11）

*19 粟津潔『不思議を目玉に入れて』現代企画室、2006年、pp.20-21

*20「ものを創りだすことは、見ることだと思う。見るということは、時には創りだすことよりも困難な場合がある。創りだすことの困難さは、見ることができない時の困難さである。」（粟津潔「見ることの意」『造形思考ノート』 p.28）

本研究は、公益財団法人 DNP 文化振興財団の2016年度「グラフィック文化に関する学術研究助成」を受けて行われた。ここ記して感謝の意を表す。

Awazu Kiyoshi and Photography

TAKAHASHI Ritsuko

Introduction

While principally working as a graphic designer, Awazu Kiyoshi was an individual who had demonstrated a multifaceted talent in fields such as oil painting, drawing, and sculpture. Nevertheless, it is hardly known that he had also been engaged in producing photographic works. The 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa holds a total of 266 photographic works by Awazu, which accounts for approximately 10 percent of the 2,939 works (as of January 2018) in its entire Awazu collection. All of such photographic works were presented in the museum's 2007-2008 exhibition, "Graphism in Wilderness: KIYOSHI AWAZU," and a list of 82 photographic works including those given temporary titles were recorded in the DVD 1 "collection data" accompanying the *Awazu Kiyoshi: Makurihirogeru (Expose) The 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa Collection Catalogue* published in 2012. As a precedent study, one can cite FUKAGAWA Masafumi's text, "The Phases of Awazu's Photography"[*1]. This survey serves to empirically investigate the scope of Awazu's photographic practice in reference to Fukagawa's research.

1. Image Analyses of Photographic Works

In this survey, one adopted the method of identifying the shooting location and year from the objective information conveyed in the photographs. In *Awazu Kiyoshi: Scrapbook*, an essay regarding his travels with his camera in "Tsugaru" is featured along with 19 photographic works noted as being "taken by Awazu in 1962." Although his commentary on photography is also included at the end of this publication under the section "works / image commentaries," the photographs of "Tsugaru" are mentioned here as having been taken March 1957, thus resulting in a difference of five years in the production year within the same publication. Furthermore, there is a photograph of a horse-drawn carriage noted under the title, "Photograph: In front of Akita Station" (**Ph-0945**). Nevertheless, almost no horse-drawn carriages were observed in the vicinities of Akita Station by 1961 when it had been rebuilt into a public-private joint-financed station as symbol of modernization[*2], and the shape of the carriage resembled that of "Tote Carriages" of which several remained in the city of Hirosaki in the Aomori Prefecture[*3].[fig. 1] For such reasons, one supposed that this photograph had in fact been taken in Hirosaki. The photograph entitled "Waiting Room, Akita Station" is also currently under investigation, and one suspects that this too, was

not taken at Akita Station[*4]. It is further to be noted that the discrepancy of information is heavily related to Awazu Kiyoshi's approach towards photography, however one would like to elaborate upon this later. First of all, *Awazu Kiyoshi: Scrapbook* was determined inappropriate as an objective source of information, and thus this survey centers its investigation on the objective information that is recorded within the photographs themselves, while at the same time drawing references from Awazu's own writings.

Tsugaru (March 1959)

The essay "Tsugaru" that is featured in *Awazu Kiyoshi: Scrapbook*, details the circumstances by which Awazu had travelled to Tsugaru due to his strong feelings of respect for Osamu Dazai. Although descriptions regarding the shooting location and year had been vague, one had decided to carry out on-site research in placing central importance on Awazu's clear and identified purpose of "taking a photographic documentation of local human life." [*5]

Ph-0799: Aomori Station

Local historian of the Aomori Prefecture indicated the possibility of the boat in the left section of the photograph being a tugboat pulling the Aomori-Hakodate ferry. From its shape, one was able to identify the boat in the right as the "Tokachimaru" that was in use up until the 1970s[*6]. [fig. 2]

Ph-0947: Aomori Station

Due to the words "Hirosaki" being written on the towel wrapped around the woman's head, it was presumed the photograph was taken in or near Aomori. Having found the names of the guesthouses "Tago Ryokan," "Daiichi Ryokan," and "Kanetomo Ryokan" seen on the signs in the left of the image in the *Aomori City Street Guide Map* (Sapporo Branch, Chuoh Publishing Co., Ltd. March 1957), it was determined the photograph was taken at Aomori Station. [fig. 3]

Ph-0861: In front of Hirosaki Sattion

The signs "Tokyu Tourist Information Office" and "Takohachi Sushi" were found side by side in the *Hirosaki Housing Detail Map* (1963). [fig. 4]

Ph-0945: Around Hirosaki?

Although the precise location of the photograph cannot be determined, it is presumed to have been taken around Hirosaki due to the shape of the carriage being that of a "Teto" horse-drawn carriage. The poster hung from the carriage is that which indicates a double-bill of the films *The Human Condition* (released January 15th, 1959) and *University Chorus* (released January 14th, 1959). As films in Hirosaki City were released a month later than the capital, one suspects it to be a photograph from around March 1959.

Ph-0806: In the City of Hirosaki

The advertisements on the utility pole in the left of the image include those that read, "Hirosaki Home-cooking Lessons" and "Shirokane Dressmaker Women's School." It is presumed the photograph was taken in or around the center of Hirosaki City.

Ph-0851: In the City of Hirosaki / Dotemachi

The phone number was cross-referenced based on the words "pharmacy" and "TEL36" on the sign. It was determined as the Kikuchi Pharmacy located in Dotemachi, Hirosaki City.

Ph-0811: In the City of Hirosaki / Dotemachi

As mentioned in *Hirosaki Housing Detail Map* (1963), "Sayama Restaurant" was found to have been located across the street from Kikuchi Pharmacy. [fig. 5]

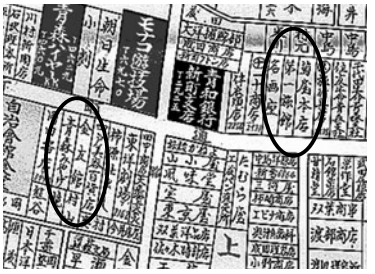
Ph-0801: In the City of Hirosaki

The film Niguruma no Uta as indicated on the poster on the utility pole was released in February 1959. The schedule of the lottery mentioned in the signboard behind the pole reads "March 10th ~ April 2•." The location of the lottery draw was next to Fuji Bank (a few blocks away on the map), at the Hirosaki Ryoshokai Office.

Ph-0896: In the City of Hirosaki / Dotemachi

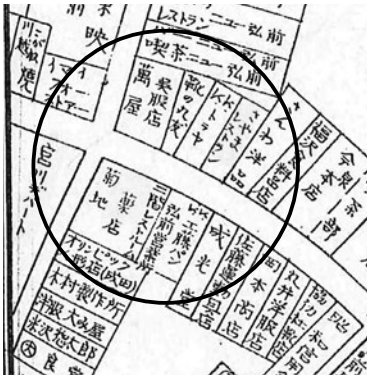
[fig.1] "Tote Carriages at the Hirosaki Station. source: *Hirosaki, Kuroishi, and Hirakawa in the Showa Period*, Iki Shuppan, 2014 (detail)

[fig.2] Tokachimaru. left:Ph-0799 (detail) right: https://blogs.yahoo.co.jp/sdrm65/35475929.html (detail)(Accessed March 13, 2018)



[fig.3] Map around Aomori station: *Aomori City Street Guide Map*, Sapporo Branch, Chuoh Publishing Co., Ltd. March 1957 (detail)

[fig.4] Map around Hirosaki station: *Hirosaki Housing Detail Map*,1961 (detail)



[fig.5] Map around Dotemachi / Hirosaki: *Hirosaki Housing Detail Map*,1961 (detail)

[fig.6] Miyagawa Departmentstore. source: http://www.mutusinpou.co.jp/ まちネタ散歩!陸奥新報(続々)

[fig.7] Source: http://www.komakino.jp/sasaki/album/kaisetu3.html(Accessed March 13, 2018)

[fig.8] Etsukokokeshi. source: http://jibaselect.blog10.fc2.com/blog-date-20120414.html(Accessed March 13, 2018)

The men in the image are wearing workmen's livery coats of the Hirosaki City Fire Brigade. From the telephone box on the right the location was determined as in front of the "Kakuha Miyagawa Department Store" in Dotemachi, Hirosaki City.[fig. 6] Sitting in front of the entrance of the department store is a man selling dog's fur, and from the photographs of Naosuke Sasaki it was also acknowledged that such sales had taken place at this location[*7]. [fig. 7]

Ph-0886: In the City of Kuroishi

On the signboard the names of the credit union "Narumi Kyoritsu Kyoritsu Shinyo Kumiai Nuruyu Branch" and the depository bank "Kuroishi Shinyo Kinko Yamagata Branch Cooperation" is written, thus the location of the photograph is presumed to be in the vicinity of Kuroishi City, Aomori Prefecture. A triple-bill that includes the films *Kyofu no Taiketsu* (1958), *The Town Hero* (1958) is advertised, and since films were ordinarily shown later in rural areas, the photograph is concluded to have been taken in March 1959.

Ph-0892: In the City of Kuroishi

A "Kokeshi" (Japanese doll) shop that is lined with a series of "Entsuko Kokeshi[fig. 8]." The calendar posted on the top of the storefront reads the words "Aomori".

Oakland, California, United States (December 1978)

Ph-0781: GRAND LAKE THEATRE

Upon researching the sign "Colonial Donuts 3318 LAKESHORE AVE." written on the bench in the lower right hand side of the image, it was identified as being an existing shop located in Oakland, California. The GRAND LAKE THEATRE was also confirmed to be an existing location[*8]. The poster of the screened feature "PINOCCHIO," was matched up with the film *PINOCCHIO* released in December 1978, thus also identifying the year in which this photograph was taken [fig. 9]. A poster advertising a Christmas sale on **Ph-0775**. The period appears to coincide with **Ph-0781**.

Lake Biwa, Lake Yogo, Nagaoka City in the Niigata Prefecture (1970)

"This spring, I went on two separate trips over the course of about half a month. The first was from the city of Takayama, Hida, to the villages surrounding Biwa Lake. From there I travelled through Maizuru to the region of Shirosaki with the film director Masahiro Shinoda. We had initially gone location hunting under the premises of making a film together, however as we didn't make a script nor a film, it simply ended up being a trip." [*9]

As Awazu himself mentions, there are several photographs of the areas surrounding Biwa Lake. The photographed year being indicated as 1970 is consistent with the image analysis of **Ph-0985**.

Ph-0985, 0986: Around Lake Biwa or Lake Yogo

The date of death written on the grave is February 27th, Showa 45. A series of objects including a milk bottle and Ferris wheel toy are placed in front of the grave. It can be identified from the black and white photograph that such are without dirt and in a clean state, suggesting only a little while to have passed since the burial. The image is thus presumed as been taken in 1970.

Ph-0963, 0964: In the city of Nagaoka

"Choei" is a film theatre that had been located in Nagaoka City. From the dates of the films on screen *Ninkyo Koboshi Kumicho To Daikashi* (released on 21st February, 1970) and *Keiken* (released on October 18th, 1969), the photographs were presumed as been taken in 1970.

Ueno, Tokyo (photographed year unknown)

Ph-0849, 0805: Ueno Park

Towards the back, the entrance of the Ueno Shochiku Theatre opened in 1953 can be seen. [fig. 10]

2. Solo Exhibition: “Sea and Blanket–Photographic Eye of Kiyoshi AWAZU”

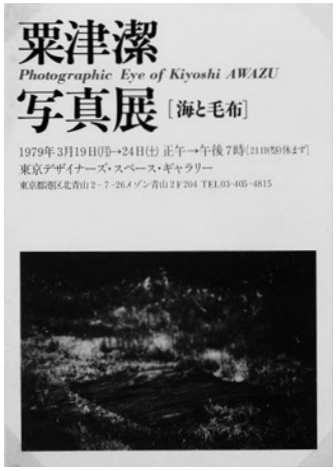
According to Fukagawa’s research, it was confirmed that Awazu had held a photography exhibition at “Tokyo Designers’ Space” between 1978 and 1979. On the occasion of this survey, one was able to newly come across the invitation for this exhibition, thus shedding light upon the details of Awazu’s exhibition o photography works. The information provided on the invitation is as follows. [fig. 11]

Exhibition Title: Sea and Blanket–Photographic Eye of Kiyoshi AWAZU
Dates: March 19th- 24th, 1979
Venue: Tokyo Designers’ Space

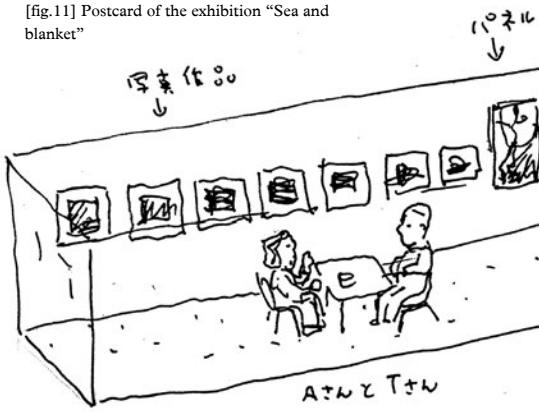
The work Ph-0751 that is in our museum’s collection is used as the main visual. It is an image of what appears to be a blanket laid out within a field. The “Tokyo Designers’ Space” that served as the venue for the exhibition, was a designers’ self-operated gallery that was opened in Aoyama, Tokyo, in 1976 *10. It was moved in 1981 to AXIS Building in Roppongi, and later dissolved in 1995. In establishing this gallery that is also important in discussing the 1970s in the history of Japanese design, the likes of TANAKA Ikko had made a foundational committee for designers who sought “a new place to present personal and experimental expressions.” Over 100 designers had been invited, with ultimately 92 taking part in its founding. The space’s inaugural project entitled “ONE DAY ONE SHOW” entailed all members to each hold a one day only exhibition, resulting in a succession of opening parties. In this way, “Tokyo Designers’ Space” had come to serve as a place of social exchange between designers. In this inaugural project, Kiyoshi Awazu had held a solo exhibition on the third day after AOBA Maski and ASABA Katsumi, in accordance to the participants’ surnames in order of the Japanese alphabet. After the “ONE DAY ONE SHOW” project ended with the exhibition of Riki Watanabe on December 22nd, a series of one day exhibitions of new members including illustrators were held the following year in 1977, and then another succession in 1978 with 60 more new members. These exhibitions were also held in alphabetical order of the participants’ surnames.
From March 1979, a new project entitled “ONE WEEK ONE SHOW” that involved the participation of 211 members was initiated. Awazu’s had been the second exhibition after that of Masaki Aoba. The third was Yuko Arai, followed by Katsumi Asaba as the fourth installment, and although generally based on alphabetical order, it is presumed that it was slightly changed due scheduled adjustments. The exhibition that Awazu had presented for this “ONE WEEK ONE SHOW” project was “Photographic Eye of Kiyoshi AWAZU.”
With regards to the circumstances of the exhibition, KAWAMURA Osamu who was an assistant at the time had worked together with Hiroshi Yamazaki who had been frequenting Awazu’s design office in developing the series of photographs that Awazu had taken over time. Kawamura had drawn out a sketch and some notes outlining the layout of the exhibition. According to Kawamura, the “Photographic Eye of Kiyoshi AWAZU” exhibition had featured photographs of fields and photographs of the oceans that were personally signed by Awazu, as well as several of his representative pieces for those who had look forward to viewing his design works.[fig. 12] It is presumed that the five photographs of “fields” featuring his handwritten signature were presented in this solo exhibition. As Shibukawa had mentioned, this series of photographs of “fields” had been “taken by Awazu who at the time had driven together with him in his car near the made lands of the Kawasaki and Ikuta areas where developments were in progress, stopping by to take photographs every time he would come across a curious scene.” Although the exhibition was held in 1979, the photographs are presumed to have been taken before 1975 as one of such images of “fields” was featured in

[fig.9] left: Ph-0781(detail) right: The Poster of Pinocchio. source: http://pixiedustpastiche.blogspot.jp/2014/01/(Accessed March 13, 2018)(detail)

[fig.10] Entrance to Ueno Shochiku Theater. source: https://blog.goo.ne.jp/ryuw-1/e/82fff92e00f943593f0671bd73c67244(Accessed March 13, 2018)(detail)



[fig.11] Postcard of the exhibition “Sea and blanket”



Awazu Kiyoshi: Scrapbook. One suspects that this "Kiyoshi Awazu photography exhibition" that was held as the second installment of the "ONE WEEK ONE SHOW" project, rather than being something that Awazu had purposefully worked towards organizing, had taken on the form of a photography exhibition that had been of interest to him at the time in an intent to convey a sense of variety in his practice.

Conclusion: Awazu's Thoughts on Photography

Awazu articulates his thoughts on photography as follows.

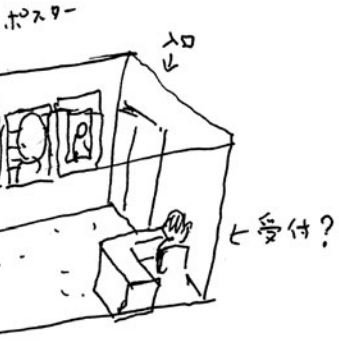
> One believes it is a great mistake to translate the "photography" in Japanese as "shashin," for the very reason that its characters being interpreted as "projecting the truth." The mechanism of photography is to transfer the outer layer of the world onto another surface, that is, onto a film. In this respect, the photography should be translated as "kawahagi" (lit. peeling away), and thus the photographer becomes a "master of peeling away." *11

> The photographer is said to capture reality, however it is quite the contrary. The photographer negates reality in transcribing the living into solidified things. Ever since this moment, people have been running towards memory *12.

[fig.13] "My Father: Awazu Esho School Days of Nanao Junior Highschool / Ishikawa April 1917"(Kiyoshi Awazu, *Fushigi wo Medama ni Irete*, Gendaikikakushitsu, 2006)

One considers that what lies at the basis of Awazu's view on photography are the four photographs of his father who had died just before Awazu turned one years old *13. [fig. 13] Awazu recalls his first encounter with his father when he was in his fifth year in elementary school, when his mother said, "this is you father," and presented him with four photographs of his father in his youth.

> In any case, my father was someone who I had only known to be within those four flimsy printed images. Within these prints I had seen my father smiling, the kind image of my father with his glasses on. I had looked upon my father with a sense of disbelief, wondering whether he was real, being under the impression of gazing at an illusion. From the very day I set eyes on these photographs, that which I came to recognize as my father, had begun to reside within my heart *14.



[fig.12] "vague recollection image of Tokyo Designers' Space" (fig.) drawn by Osamu Kawamura after his interview (March 22, 2017)

Awazu objectively recognizes how he has in fact established his own image of his father from these photographs, interpreting what he sees not as the reality of who is father was, but instead as an "objectification." Even when approaching photographs featured in old magazines and photobooks, Awazu considers them to be "objects," thus engages in the task of "objectifying" them through his own hands via means of montage.
Awazu states that, "sketching and taking photographs is to look at objects." In his mind, sketching and taking photographs are sensibly alike, and the act of "objectifying" is to "look at" what lies beyond and create something *15.
Awazu's photographs vividly reflect what he had seen through his very own eyes. In "looking" at these photographs that he himself had taken, Awazu abandons realism and engages in "objectification." In this respect, it is understandable that the confusion of truth regarding the place and time the photographs were taken as mentioned in *Awazu Kiyoshi: Scrapbook*, is that which is of little importance.

When Awazu's attitude towards photography had come to reveal itself, one began to question whether it was indeed meaningful to continue this survey in pursuit of such "truth." Nevertheless, through approaching the "truth" one was undoubtedly able to gain an understanding of what Awazu had seen and considered in creating things. One thus hopes to continue this survey in confident belief that "looking" at his works as objectively as possible will serve as a means to venture closer to this variant designer.

*1 Masafumi Fukagawa, "The Phases of Awazu's *Photography," Kiyoshi Awazu Retrospective: Re-Reproduction*, Kawasaki City Museum, 2009, pp.110-113

*2 "When the railway network was established in the Taisho period, and with the expansion of bus routes, horse-drawn carriages were rendered obsolete." Ed. Akita Prefectural Public Archives, *2009 Akita Prefectural Public Archives Organized Exhibition "Transport System of Modern Akita seen through Public Archives" pamphlet* (pdf version), Akita Prefecture, p.

*3 http://www.mutusinpou.co.jp/ 津軽の街と風景 /2015/05/36229.html (Accessed March 13, 2018)

*4 No reference material that would serve to ground one's argument was found when referencing the Akita City Central Library Meitokukan in March 2017. In interviewing several individuals who had been familiar with the times, it was the opinion that the photograph was likely taken in Akita Station.

*5 Kiyoshi Awazu, *Awazu Kiyoshi: Scrapbook*, Tabata Shoten, 1970, p.22

*6 https://www.youtube.com/watch?v=CXVB90jGGNk(Accessed March 13, 2018)

*7 http://www.mutusinpou.co.jp/ まちネタ散歩！陸奥新報（続々）/2014/11/33970.html(Accessed March 13, 2018)

*8 http://www.renaissancerialto.com(Accessed March 13, 2018)

*9 Kiyoshi Awazu, *Awazu Kiyoshi: Scrapbook*, Tabata Shoten, 1970, p.38

*10 Tokyo Designers' Space Documentation Catalogue Committee Edition, *Tokyo Designers' Space 1976-1995*, 1999

*11 Kiyoshi Awazu, "From Zero Year Seascape," *Awazu Kiyoshi Collection vol. 1: Illustrations and Designs*, Kodansha Ltd., 1978, p. 196

*12 Kiyoshi Awazu, "Montage," *Graphic Eye (Zokei Shiko Noto)*, Kawade Shobo Shinsha Publishers Inc., 1975, p.32

*13 KAWAZOE Noboru points out Awazu's influences from the photographs of his father in his image works as follows. "Kiyoshi Awazu lost his father when he was young, and the image of his father that exists within his memory, is the father who he had seen in the photographs. Although his father continues to live on in the photographs he is in fact deceased, thus Awazu had continued to observe both senses of life and death in photographs since the days of his childhood. It is precisely here in which Awazu had sensed the strangeness of the image. The image is like a ghost. It was tragic fate to feel death in the image, and environmentalize everything that's on the outside. Through his eyes as a visual designer, Awazu had transformed all means of landscapes into his own environment. In such moment however, the landscape itself meets its death." (Noboru Kawazoe, "Kiyoshi Awazu's Designs for Environments," *Awazu Kiyoshi Collection vol. 3: Environment Design and Paintings*, Kodansha Ltd., 1979, p.11)

*14 Kiyoshi Awazu, *Fushigi wo Medama ni Irete*, Gendaikikakushitsu, 2006, pp.20-21

*15 "I believe that to create something means to look at something. To look at something is at times more difficult than creating something. The difficulty of creating something is the very same difficulty experienced when not being able to look at something." (Kiyoshi Awazu, "The Meaning of Looking," *Zokei Shiko Noto*, p.28

粟津潔｜写真作品リスト

Awazu Kiyoshi｜List of Photographic Works

［凡例］

1. 本リストは、金沢21世紀美術館が所蔵する粟津潔の全写真作品（登録番号Ph）の図版を掲載した。
2. 作品名は、粟津潔の著作等の調査より登録されたタイトルを記した。
3. 撮影年および撮影場所については、2016年より高橋律子が調査した情報を記載。推定情報については（ ）で示した。（2018年3月15日現在）

Explanatory Notes

1. This list features images (registration number-Ph) of all of Kiyoshi Awazu's photographic works held in the collection of the 21st Century of Contemporary Art, Kanazawa.
2. The titles of the works listed are based on those registered as a result of researching the writings and publications of Awazu Kiyoshi.
3. The shooting year and location of the photograph listed is based on the information researched since 2016 by Takahashi Ritsuko. Presumed information is indicated in ( ). (March 15, 2018)

Ph-0748
（海と毛布）
（Sea and Blanket）
昭和50年頃｜ c.1975
（神奈川県川崎市 / 生田）
(Kawasaki, Kanagawa / Ikuta)

Ph-0749
–
–
–
–
–

Ph-0750
–
–
–
–
–

Ph-0751
（海と毛布）
（Sea and Blanket）
昭和50年頃｜ c.1975
（神奈川県川崎市 / 生田）
(Kawasaki, Kanagawa / Ikuta)

Ph-0752
（海と毛布）
（Sea and Blanket）
昭和50年頃｜ c.1975
（神奈川県川崎市 / 生田）
(Kawasaki, Kanagawa / Ikuta)

Ph-0753
–
–
–
–
–

Ph-0754
（はなれ瞽女おりん）
(Ballad of Orin)
昭和52年頃｜ c.1977
–
–

Ph-0755
秋田駅待合室
Waiting Room in the Akita Station
昭和34年3月｜ March, 1959
(秋田駅ではない)
(Not Akita Station)

Ph-0756
–
–
–
–
–

Ph-0757
–
–
–
–
–

Ph-0758
–
–
–
–
–

Ph-0759
–
–
–
–
–

Ph-0760
–
–
–
–
–

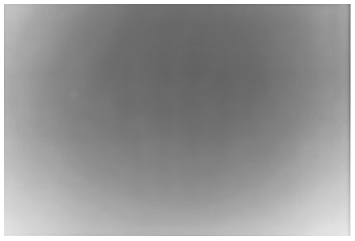
Ph-0761（**Ph-0954と同一**）
竜飛崎の子供
Chirdren at Cape Tappi
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県東津軽郡 / 龍飛崎
Higashitsugaru, Aomori / Cape Tappi

Ph-0762
（竜飛崎の宿にて）
In the Hotel at Cape Tappi
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県東津軽郡 / 龍飛崎
Higashitsugaru, Aomori / Cape Tappi

Ph-0763
–
–
–
–
–

Ph-0764
田園風景
Rural Landscape
–
–
–

Ph-0765
–
–
–
–
–



Ph-0766
–
–
–
–
–

Ph-0767
–
–
–
–
–

Ph-0768
（はなれ瞽女おりん）
(Ballad of Orin)
昭和52年頃｜ c.1977
–
–

Ph-0769
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0770
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0771
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0772
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0773
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0774
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0775
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0776
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0777
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0778
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0779
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0780
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0781
–
–
昭和53年12月｜ December, 1978
アメリカ、カリフォルニア州オークランド／グランド・レイク・シアター
Oakland, California, USA / Grand Lake Theatre

Ph-0782
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0783
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0784
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0785
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0786
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0787
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0788
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0789
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0790
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0791
–
–
（昭和53年12月）｜（December, 1978）
（アメリカ）
(USA)

Ph-0792
–
–
–
–
–

Ph-0793
–
–
–
–
–

Ph-0794
（はなれ瞽女おりん）
(Ballad of Orin)
昭和52年頃｜ c.1977
新潟県上越市
Joetsu, Niigata

Ph-0795
（はなれ瞽女おりん）
(Ballad of Orin)
昭和52年頃｜ c.1977
新潟県上越市
Joetsu, Niigata

Ph-0796
–
–
–
–
–

Ph-0797
–
–
沖縄県糸満市 / 幸地腹・赤比儀腹両門中墓
Itoman, Okinawa / Kochi-bara and Akahigibara
Joint-patrilineal Family Tombs

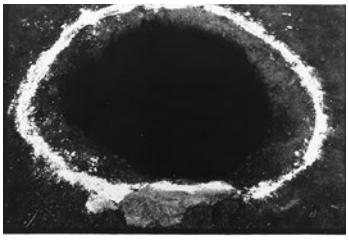
Ph-0798
（はなれ瞽女おりん）
(Ballad of Orin)
昭和52年頃｜ c.1977
新潟県上越市
Joetsu, Niigata

Ph-0799
–
–
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県青森市 / 青函連絡船青森駅
Aomori, Aomori / Aomori Station for Aomori-Hakodate Ferry

Ph-0800
海辺の親子
Mother and Son in the Beach
–
神奈川県三浦郡 / 一色海岸
Miura-gun, Kanagawa / Isshiki Beach

Ph-0801
–
–
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県弘前市
Hirosaki, Aomori

Ph-0802
–
–
–
–
–



Ph-0803
–
–
–
岡山県津山市
Tsuyama, Okayama

Ph-0804
–
–
–
神奈川県三浦郡 / 一色海岸
Miura-gun, Kanagawa / Isshiki Beach

Ph-0805
–
–
–
東京都台東区 / 上野公園
Taito, Tokyo / Ueno Park

Ph-0806
–
–
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県弘前市
Hirosaki, Aomori

Ph-0807
–
–
–
東京都中央区 / 皇居
Chuo, Tokyo / Imperial Palace

Ph-0808
–
–
–
–
–

Ph-0809
（ホゼー・トレス）
(José Torres)
–
–
–

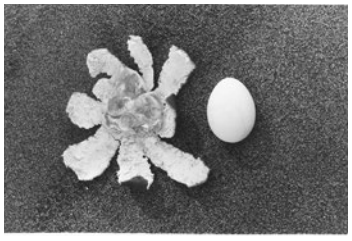
Ph-0810
–
–
沖縄県糸満市 / 幸地腹・赤比儀腹両門中墓
Itoman, Okinawa / Kochi-bara and Akahigibara
Joint-patrilineal Family Tombs

Ph-0811
–
–
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県弘前市
Hirosaki, Aomori

Ph-0812
–
–
–
–
–

Ph-0813
（砂の女）
(The Woman in the Dunes)
昭和39年頃｜ c.1964
静岡県御前崎市 / 浜岡砂丘
Omaezaki, Shizuoka / Hamaoka Desert

Ph-0814
–
–
–
–
–



Ph-0815
–
–
–
–
–

Ph-0816
–
–
–
–
–

Ph-0817
–
–
–
–
–

Ph-0818
（はなれ瞽女おりん）
(Ballad of Orin)
昭和52年頃｜ c.1977
–
–

Ph-0819
（リンゴ園）
（Apple Orchard）
–
–
–

Ph-0820
–
–
–
–
–

Ph-0821
–
–
–
–
–

Ph-0822
–
–
–
–
–

Ph-0823
シャボン玉屋
Bubble Shop
–
–
–

Ph-0824
（ホゼー・トレス）
(José Torres)
–
–
–

Ph-0825
（ホゼー・トレス）
(José Torres)
–
–
–

Ph-0826
（ホゼー・トレス）
(José Torres)
–
–
–

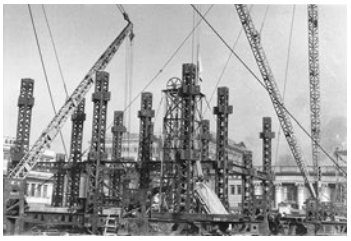
Ph-0827
（ホゼー・トレス）
(José Torres)
–
–
–

Ph-0828
–
–
–
–
–

Ph-0829
（ホゼー・トレス）
(José Torres)
–
–
–

Ph-0830
（ホゼー・トレス）
(José Torres)
–
–
–

Ph-0831
（ホゼー・トレス）
(José Torres)
–
–
–



Ph-0832
–
–
–
–
–

Ph-0833
（ホゼー・トレス）
(José Torres)
–
–
–

Ph-0834
（ホゼー・トレス）
(José Torres)
–
–
–

Ph-0835
（ホゼー・トレス）
(José Torres)
–
–
–

Ph-0836
（ホゼー・トレス）
(José Torres)
–
–
–

Ph-0837
（ホゼー・トレス）
(José Torres)
–
–
–

Ph-0838
（ホゼー・トレス）
(José Torres)
–
–
–

Ph-0839
（ホゼー・トレス）
(José Torres)
–
–
–

Ph-0840
（ホゼー・トレス）
(José Torres)
–
–
–

Ph-0841
–
–
–
–
–

Ph-0842
–
–
–
–
–

Ph-0843
–
–
–
–
–

Ph-0844
–
–
–
神奈川県三浦郡 / 一色海岸
Miura-gun, Kanagawa / Isshiki Beach

Ph-0845
–
–
–
–
–

Ph-0846
–
–
–
–
–

Ph-0847
（砂の女）
(The Woman in the Dunes)
昭和39年頃｜ c.1964
静岡県御前崎市 / 浜岡砂丘
Omaezaki, Shizuoka / Hamaoka Desert

Ph-0848
–
–
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県東津軽郡 / 龍飛崎
Higashitsugaru, Aomori / Cape Tappi

Ph-0849
–
–
–
東京都台東区 / 上野公園
Taito, Tokyo / Ueno Park

Ph-0850
–
–
（昭和34年3月｜ March, 1959）
（青森県青森市 / 青森駅）
（Aomori, Aomori / Aomori Station）

Ph-0851
–
–
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県弘前市 / 土手町
Hirosaki, Aomori / Dote-machi

Ph-0852
–
–
–
–
–

Ph-0853（**Ph-0951と同一**）
シャボン玉屋
Bubble Shop
–
–
–

Ph-0854（**Ph-0945と同一**）
秋田駅前
in front of the Akita Station
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県弘前市
Hirosaki, Aomori

Ph-0855
竜飛崎の宿にて
In the Hotel at Cape Tappi
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県東津軽郡 / 龍飛崎
Higashitsugaru, Aomori / Cape Tappi

Ph-0856
（竜飛崎の宿にて）
（In the Hotel at Cape Tappi）
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県東津軽郡 / 龍飛崎
Higashitsugaru, Aomori / Cape Tappi

Ph-0857
–
–
–
–
–

Ph-0858
–
–
–
–
–

Ph-0859
–
–
–
–
–

Ph-0860
–
–
沖縄県糸満市 / 幸地腹・赤比儀腹両門中墓
Itoman, Okinawa / Kochi-bara and Akahigibara
Joint-patrilineal Family Tombs

Ph-0861
–
–
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県弘前市
Hirosaki, Aomori

Ph-0862
–
–
–
–
–

Ph-0863
（砂の女）
(The Woman in the Dunes)
昭和39年頃｜ c.1964
静岡県御前崎市 / 浜岡砂丘
Omaezaki, Shizuoka / Hamaoka Desert

Ph-0864
–
–
–
岡山県津山市
Tsuyama, Okayama

Ph-0865
–
–
–
–
–

Ph-0866
（田園に死す）
(DENEN NI SHISU, Death in Field)
昭和49年｜1974
青森県むつ市 / 恐山
Mutsu, Aomori / Osorezan

Ph-0867
（田園に死す）
(DENEN NI SHISU, Death in Field)
昭和49年｜1974
青森県むつ市 / 恐山
Mutsu, Aomori / Osorezan

Ph-0868
（田園に死す）
(DENEN NI SHISU, Death in Field)
昭和49年｜1974
青森県むつ市 / 恐山
Mutsu, Aomori / Osorezan

Ph-0869
（砂の女）
(The Woman in the Dunes)
昭和39年頃｜ c.1964
静岡県御前崎市 / 浜岡砂丘
Omaezaki, Shizuoka / Hamaoka Desert

Ph-0870
–
–
–
–
–

Ph-0871
–
–
–
神奈川県三浦郡 / 一色海岸
Miura-gun, Kanagawa / Isshiki Beach

Ph-0872
（はなれ瞽女おりん）
(Ballad of Orin)
昭和52年頃｜ c.1977
–
–

Ph-0873
（砂の女）
(The Woman in the Dunes)
昭和39年頃｜ c.1964
静岡県御前崎市 / 浜岡砂丘
Omaezaki, Shizuoka / Hamaoka Desert

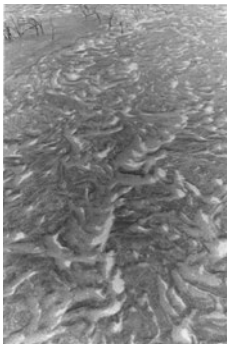
Ph-0874
（ホゼー・トレス）
(José Torres)
–
–
–

Ph-0875
（ホゼー・トレス）
(José Torres)
–
–
–

Ph-0876
（ホゼー・トレス）
(José Torres)
–
–
–

Ph-0877
–
–
–
–
–

Ph-0878
–
–
–
岡山県倉敷市 / 美観地区
Kurashiki, Okayama / Bikan Historical Quarter



Ph-0879
–
–
–
–
–

Ph-0880
–
–
–
–
–

Ph-0881
–
–
–
–
–

Ph-0882
（はなれ瞽女おりん）
(Ballad of Orin)
昭和52年頃｜ c.1977
–
–

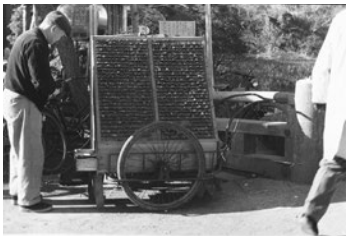
Ph-0883
–
–
–
–
–

Ph-0884
–
–
–
–
–

Ph-0885
（はなれ瞽女おりん）
(Ballad of Orin)
昭和52年頃｜ c.1977
–
–

Ph-0886
–
–
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県黒石市
Kuroishi, Aomori

Ph-0887
–
–
–
神奈川県三浦郡 / 一色海岸
Miura-gun, Kanagawa / Isshiki Beach



Ph-0888
–
–
–
–
–

Ph-0889
–
–
–
–
–

Ph-0890（**Ph-0946と同一**）
–
–
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県弘前市
Hirosaki, Aomori

Ph-0891
–
–
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県黒石市 / 沖浦ダム
Kuroishi, Aomori / The Okiura Dam

Ph-0892
–
–
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県黒石市
Kuroishi, Aomori

Ph-0893（**Ph-0935と同一**）
–
–
–
–
–

Ph-0894
–
–
昭和30 ～ 40年代｜1960s
近鉄モ200形
Series 200 Kintetsu train

Ph-0895
–
–
–
–
–

Ph-0896
–
–
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県弘前市 / 土手町
Hirosaki, Aomori / Dote-machi

Ph-0897
–
–
–
–
–

Ph-0898
–
–
–
–
–

Ph-0922
（リンゴ園）
（Apple Orchard）
–
–
–

Ph-0923
リンゴ園
Apple Orchard
–
–
–

Ph-0924
–
–
–
–
–

Ph-0925
リンゴ園
Apple Orchard
–
–
–

Ph-0926
（リンゴ園）
（Apple Orchard）
–
–
–

Ph-0927
（リンゴ園）
（Apple Orchard）
–
–
–

Ph-0928
（リンゴ園）
（Apple Orchard）
–
–
–

Ph-0929
（リンゴ園）
（Apple Orchard）
–
–
–

Ph-0930
（リンゴ園）
（Apple Orchard）
–
–
–

Ph-0931
–
–
–
–
–

Ph-0932
–
–
–
–
–

Ph-0933
–
–
–
–
–

Ph-0934
–
–
–
–
–

Ph-0935（Ph-0893と同一）
–
–
–
–
–

Ph-0936
–
–
–
–
–

Ph-0937
–
–
–
–
–

Ph-0938
竜飛崎海岸にて
In the Beach of Cape Tappi
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県東津軽郡 / 龍飛崎
Higashitsugaru, Aomori / Cape Tappi

Ph-0939
（田園に死す）
(DENEN NI SHISU, Death in Field)
昭和51年｜1976
青森県むつ市 / 恐山
Mutsu, Aomori / Osorezan

Ph-0940
（田園に死す）
(DENEN NI SHISU, Death in Field)
昭和51年｜1976
青森県むつ市 / 恐山
Mutsu, Aomori / Osorezan

Ph-0941
–
–
（昭和34年3月｜ March, 1959）
（青森県東津軽郡 / 龍飛崎）
（Higashitsugaru, Aomori / Cape Tappi）

Ph-0942
–
–
（昭和34年3月｜ March, 1959）
（青森県東津軽郡 / 龍飛崎）
（Higashitsugaru, Aomori / Cape Tappi）

Ph-0943
–
–
（昭和34年3月｜ March, 1959）
（青森県東津軽郡 / 龍飛崎）
（Higashitsugaru, Aomori / Cape Tappi）

Ph-0944
–
–
（昭和34年3月｜ March, 1959）
（青森県青森市 / 青森駅）
（Aomori, Aomori / Aomori Station）

Ph-0945（**Ph-0854と同一**）
秋田駅前
in front of the Akita Station
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県弘前市
Hirosaki, Aomori

Ph-0946（**Ph-0890と同一**）
–
–
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県弘前市
Hirosaki, Aomori

Ph-0947
–
–
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県青森市 / 青森駅
Aomori, Aomori / Aomori Station

Ph-0948
秋田駅待合室
Waiting Room in the Akita Station
昭和34年3月｜ March, 1959
（秋田駅ではない）
（Not Akita Station）

Ph-0949
秋田駅待合室
Waiting Room in the Akita Station
昭和34年3月｜ March, 1959
（秋田駅ではない）
（Not Akita Station）

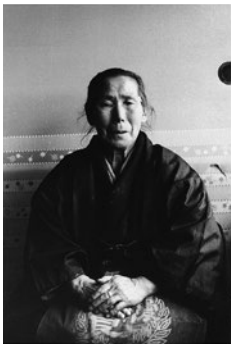
Ph-0950
–
–
–
–
–

Ph-0951（**Ph-0853と同一**）
シャボン玉屋
Bubble Shop
–
–
–

Ph-0952
シャボン玉屋
Bubble Shop
–
–
–

Ph-0953
–
–
–
–
–

Ph-0954（**Ph-0761と同一**）
竜飛崎の子供
Chirdren at Cape Tappi
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県東津軽郡 / 龍飛崎
Higashitsugaru, AomoriCape Tappi



Ph-0955
竜飛崎の宿にて
In the Hotel at Cape Tappi
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県東津軽郡 / 龍飛崎
Higashitsugaru, AomoriCape Tappi

Ph-0956
（竜飛崎の宿にて）
(In the Hotel at Cape Tappi)
昭和34年3月｜ March, 1959
青森県東津軽郡 / 龍飛崎
Higashitsugaru, AomoriCape Tappi

Ph-0957

–
–
–
–
–

Ph-0958

–
–
–
–
–

Ph-0959

–
–
–
–
–

Ph-0960

–
–
–
–
–

Ph-0961

–
–
–
–
–

Ph-0962

–
–
–
–
–

Ph-0963

–
–
昭和45年｜1970
新潟県長岡市
Nagaoka, Niigata

Ph-0964

–
–
昭和45年｜1970
新潟県長岡市
Nagaoka, Niigata

Ph-0965

–
–
–
–
–

Ph-0966
–
–
–
–
–

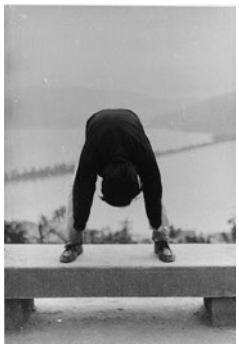
Ph-0967
–
–
–
–
–

Ph-0968
–
–
–
–
–

Ph-0969
余呉湖
Lake Yogo
昭和45年4月｜ April, 1970
滋賀県長浜市 / 余呉湖
Nagahama, Shiga / Lake Yogo

Ph-0970
–
–
昭和45年4月｜ April, 1970
滋賀県長浜市 / 余呉湖
Nagahama, Shiga / Lake Yogo

Ph-0971
–
–
–
–
–



Ph-0972
天の橋立
Amanohashidate
昭和45年4月｜ April, 1970
京都府宮津市 / 天の橋立
Miyatsu, Kyoto / Amanohashidate

Ph-0973
（天の橋立）
(Amanohashidate)
昭和45年4月｜ April, 1970
京都府宮津市 / 天の橋立
Miyatsu, Kyoto / Amanohashidate

Ph-0974
長崎島原の海
The Sea of the Shimabara, Nagasaki
–
長崎県島原市
Shimabara, Nagasaki

Ph-0975
長崎島原の海
The Sea of the Shimabara, Nagasaki
–
長崎県島原市
Shimabara, Nagasaki

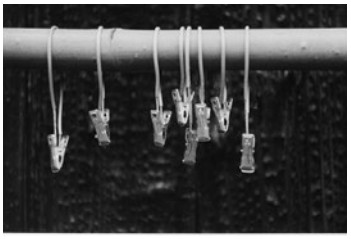
Ph-0977
琵琶湖にて
At Biwa Lake
昭和45年4月｜ April, 1970
滋賀県長浜市 / 琵琶湖周辺
Nagahama, Shiga /Around Lake Biwa

Ph-0978
–
–
–
–
–

Ph-0979
–
–
–
–
–

Ph-0980
–
–
–
滋賀県長浜市／木之本
Nagahama, Shiga / Kinomoto

Ph-0981
琵琶湖にて
At Biwa Lake
昭和45年4月｜ April, 1970
（滋賀県長浜市／木之本）
（Nagahama, Shiga / Kinomoto）



Ph-0982
–
–
–
–
–

Ph-0983
–
–
–
–
–

Ph-0984
–
–
（昭和45年4月｜ April, 1970）
（滋賀県長浜市 / 琵琶湖周辺）
（Nagahama, Shiga /Around Lake Biwa）

Ph-0985
（琵琶湖近くの墓地）
（The Cemetery near Biwa Lake）
昭和45年4月｜ April, 1970
滋賀県長浜市 / 琵琶湖周辺
Nagahama, Shiga /Around Lake Biwa

Ph-0986
（琵琶湖近くの墓地）
（The Cemetery near Biwa Lake）
昭和45年4月｜ April, 1970
滋賀県長浜市 / 琵琶湖周辺
Nagahama, Shiga /Around Lake Biwa

Ph-0987
（琵琶湖近くの墓地）
（The Cemetery near Biwa Lake）
昭和45年4月｜ April, 1970
滋賀県長浜市 / 琵琶湖周辺
Nagahama, Shiga /Around Lake Biwa

Ph-0988
（琵琶湖近くの墓地）
（The Cemetery near Biwa Lake）
昭和45年4月｜ April, 1970
滋賀県長浜市 / 琵琶湖周辺
Nagahama, Shiga /Around Lake Biwa

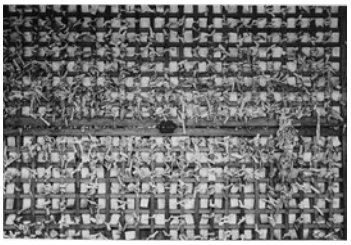
Ph-0989
（琵琶湖近くの墓地）
（The Cemetery near Biwa Lake）
昭和45年4月｜ April, 1970
滋賀県長浜市 / 琵琶湖周辺
Nagahama, Shiga /Around Lake Biwa

Ph-0990
（琵琶湖近くの墓地）
（The Cemetery near Biwa Lake）
昭和45年4月｜ April, 1970
滋賀県長浜市 / 琵琶湖周辺
Nagahama, Shiga /Around Lake Biwa

Ph-0991
（琵琶湖近くの墓地）
（The Cemetery near Biwa Lake）
昭和45年4月｜ April, 1970
滋賀県長浜市 / 琵琶湖周辺
Nagahama, Shiga /Around Lake Biwa

Ph-0992
（琵琶湖近くの墓地）
（The Cemetery near Biwa Lake）
昭和45年4月｜ April, 1970
滋賀県長浜市 / 琵琶湖周辺
Nagahama, Shiga /Around Lake Biwa

Ph-0993
（琵琶湖近くの墓地）
（The Cemetery near Biwa Lake）
昭和45年4月｜ April, 1970
滋賀県長浜市 / 琵琶湖周辺
Nagahama, Shiga /Around Lake Biwa



Ph-0994
神社の奉安殿の扉
The door of the Hoanden in the shrine
昭和45年4月｜ April, 1970
京都府宮津市 / 智恩寺
Miyatsu, Kyoto / Chionji Temple

Ph-0995
（神社の奉安殿の扉）
(The door of the Hoanden in the shrine)
昭和45年4月｜ April, 1970
京都府宮津市 / 智恩寺
Miyatsu, Kyoto / Chionji Temple

Ph-0996
（神社の奉安殿の扉）
(The door of the Hoanden in the shrine)
昭和45年4月｜ April, 1970
京都府宮津市 / 智恩寺
Miyatsu, Kyoto / Chionji Temple

Ph-0997
–
–
昭和45年4月｜ April, 1970
滋賀県長浜市 / 渡岸寺
–

Ph-0998
–
–
昭和45年4月｜ April, 1970
滋賀県長浜市 / 北野神社
–

Ph-0999
–
–
–
–
–

Ph-1000
–
–
昭和45年4月｜ April, 1970
滋賀県長浜市 / 北野神社
–

Ph-1001
–
–
昭和45年4月｜ April, 1970
滋賀県長浜市 / 文珠堂
–

Ph-1008
–
–
–
–
–

Ph-1009

–
–
–
–
–

Ph-1010

–
–
–
–
–

Ph-1011

–
–
–
–
–

Ph-1012

–
–
–
–
–

Ph-1013

–
–
–
–
–

Ph-1014

–
–
–
–
–

Ph-1015

–
–
–
神奈川県三浦郡 / 一色海岸
Miura-gun, Kanagawa / Isshiki Beach

Ph-1016

–
–
–
神奈川県三浦郡 / 一色海岸
Miura-gun, Kanagawa / Isshiki Beach

Ph-1017

–
–
–
神奈川県三浦郡 / 一色海岸
Miura-gun, Kanagawa / Isshiki Beach

Ph-1018
–
–
–
神奈川県三浦郡／一色海岸
Miura-gun, Kanagawa / Isshiki Beach

Ph-1019
–
–
–
神奈川県三浦郡 / 一色海岸
Miura-gun, Kanagawa / Isshiki Beach

Ph-1020
–
–
–
神奈川県三浦郡 / 一色海岸
Miura-gun, Kanagawa / Isshiki Beach

Ph-1021
–
–
–
神奈川県三浦郡 / 一色海岸
Miura-gun, Kanagawa / Isshiki Beach

Ph-1022
–
–
–
神奈川県三浦郡 / 一色海岸
Miura-gun, Kanagawa / Isshiki Beach

Ph-1023
–
–
–
神奈川県三浦郡 / 一色海岸
Miura-gun, Kanagawa / Isshiki Beach

Ph-1024
–
–
–
神奈川県三浦郡 / 一色海岸
Miura-gun, Kanagawa / Isshiki Beach

Ph-1025
–
–
–
神奈川県三浦郡 / 一色海岸
Miura-gun, Kanagawa / Isshiki Beach

Ph-1026
–
–
–
神奈川県三浦郡 / 一色海岸
Miura-gun, Kanagawa / Isshiki Beach

Ph-1027
–
–
昭和50年頃｜ c.1975
神奈川県川崎市 / 生田
Kawasaki, Kanagawa / Ikuta

Ph-1028
–
–
昭和50年頃｜ c.1975
（神奈川県川崎市 / 生田）
Kawasaki, Kanagawa / Ikuta

Ph-1029
–
–
昭和50年頃｜ c.1975
（神奈川県川崎市 / 生田）
Kawasaki, Kanagawa / Ikuta

Ph-1030
–
–
昭和50年頃｜ c.1975
（神奈川県川崎市 / 生田）
Kawasaki, Kanagawa / Ikuta

Ph-1031
–
–
昭和50年頃｜ c.1975
（神奈川県川崎市 / 生田）
Kawasaki, Kanagawa / Ikuta

Ph-1032
–
–
昭和50年頃｜ c.1975
（神奈川県川崎市 / 生田）
Kawasaki, Kanagawa / Ikuta

Ph-1033
–
–
昭和50年頃｜ c.1975
（神奈川県川崎市 / 生田）
Kawasaki, Kanagawa / Ikuta

Ph-1034
–
–
昭和50年頃｜ c.1975
（神奈川県川崎市 / 生田）
Kawasaki, Kanagawa / Ikuta

Ph-1035
–
–
昭和50年頃｜ c.1975
（神奈川県川崎市 / 生田）
Kawasaki, Kanagawa / Ikuta

Ph-1036

–

–

昭和50年頃｜ c.1975

（神奈川県川崎市 / 生田）

Kawasaki, Kanagawa / Ikuta

Ph-1037

–

–

昭和50年頃｜ c.1975

（神奈川県川崎市 / 生田）

Kawasaki, Kanagawa / Ikuta

Ph-1038

–

–

昭和50年頃｜ c.1975

（神奈川県川崎市 / 生田）

Kawasaki, Kanagawa / Ikuta

Ph-1039

–

–

–

–

–

Ph-1040

–

–

–

–

–

Ph-1041

–

–

–

–

–

Ph-1042

–

–

–

–

–

Ph-1043

–

–

–

–

–

謝辞

「海と毛布－粟津潔の写真について」展のための調査にあたり、
多大なるご協力を賜りました関係機関、関係者の皆様に
深く感謝の意を表します。（敬称略）

公益財団法人 DNP 文化振興財団

青森県立郷土館
秋田市立中央図書館明徳館
五所川原市立図書館
津軽鉄道株式会社
DNA Media 株式会社
中泊町博物館
粟津デザイン室
石田哲朗
川村易
佐藤仁
平井直子
深川雅文
福井敏隆

Acknowledgement

We would like to express our deepest gratitude to
all those who contributed to the research for the exhibition
“ Sea and Blanket – The Photographs of Awazu Kiyoshi ”

DNP Foundation for Cultural Promotion

Aomori Prefectural Museum
Akita City Central Library MEITOKUKAN
Goshogawara City Library
Tsugaru Railway Co.,Ltd
DNA Media K.K.
Nakadomari Museum
Awazu Design Office
ISHIDA Tetsuro
KAWAMURA Osamu
SATO Hitoshi
HIRAI Naoko
FUKAGAWA Masafumi
FUKUI Toshitaka

金沢21世紀美術館維持会員リスト（2018年3月1日現在）

SANAA 事務所 / 米沢電気工事株式会社 / ナカダ株式会社 / 金沢市農業協同組合 / 株式会社 福光屋 / ヨシダ宣伝株式会社 /
金沢信用金庫 / 株式会社 総合園芸 / 西日本電信電話株式会社 金沢支店 / 株式会社 ヤギコーポレーション / 株式会社 北國銀行 /
一般社団法人 金沢建設業協会 / ニッコー株式会社 / 医療法人社団 健真会 耳鼻咽喉科安田医院 / 株式会社 メープルハウス /
株式会社 マイブックサービス / 公益財団法人 金沢勤労者福祉サービスセンター / 株式会社 浦建築研究所 / 金沢中央農業協同組合 /
株式会社 グランゼーラ / まつだ小児科クリニック / 公益財団法人 高岡市勤労者福祉サービスセンター / アルスコンサルタンツ株式会社 /
しま矯正歯科 / 協同組合 金沢問屋センター / 一般社団法人 MuU / 三谷産業株式会社 / スーパーファクトリー / 株式会社 中島商店 /
株式会社 橋本確文堂 / ヨシダ印刷株式会社 / 株式会社 パークウェーブ / 株式会社 北都組 / 金沢市一般廃棄物事業協同組合 /
金沢商工会議所 / 株式会社 竹中工務店 北陸営業所 / 一般社団法人 石川県鉄工機電協会 / 大村印刷株式会社 / 石川県勤労者文化協会 /
前田印刷株式会社 / 株式会社 うつのみや / 公益社団法人 金沢市医師会 / 連合石川かなざわ地域協議会 / 株式会社 金沢環境サービス公社 /
医療法人社団 竹田内科クリニック / 株式会社 日本海コンサルタント / 株式会社 アイ・オー・データ機器 / 石川県中小企業団体中央会 /
能登印刷株式会社 / 株式会社 金沢舞台 / 北陸名鉄開発株式会社 / 高桑美術印刷株式会社 / 株式会社 浅田屋 / 北菱電興株式会社 /
株式会社 四緑園 / 株式会社 橋本清文堂 / カナカン株式会社 / 株式会社 かゆう堂 / 株式会社 バルデザイングループ /
石川県ビルメンテナンス協同組合 / 横浜エレベータ株式会社 / 株式会社 ほくつう / 株式会社 グッドフェローズ / 日本海警備保障株式会社 /
株式会社 山越 / 田中昭文堂印刷株式会社 / 株式会社 金沢商業活性化センター / 株式会社 加賀麩不室屋 / べにや無何有 /
日本ケンブリッジフィルター株式会社 / めいてつ・エムザ / 日機装株式会社 / 横河電機株式会社 金沢事業所 /
協同組合 日本ビジネスロードセンター / 有限会社 芙蓉クリーンサービス / 株式会社 インプレス 美術事業部 / 株式会社甘納豆かわむら /
ArtShop 月映 / 株式会社 アドバンス社 / 金沢ターミナル開発株式会社 / 株式会社 計画情報研究所 / 株式会社 ビー・エム北陸 /
一般社団法人 石川県繊維協会 / 株式会社 大和 / 北陸東和冷暖房株式会社 / アムズ株式会社 / 株式会社 あまつぼ /
ヨシダ道路企業株式会社 / 株式会社 金太 / イワタニ北陸株式会社 / 末広フーズ株式会社 / 北陸スカイテック株式会社 / 辻商事株式会社 /
アキュテック株式会社 / イカリ消毒株式会社 / 森平舞台機構株式会社 / 株式会社 クスリのアオキ / アズビル株式会社 / 北陸電話工事株式会社 /
株式会社 五井建築研究所 / 金沢セメント商事株式会社 / 株式会社 エイプルコンピュータ / ホクモウ株式会社 / 医療法人社団 映寿会 /
鮨 みつ川 / 株式会社山田写真製版所 / 株式会社ユニークポジション / 株式会社ロフト金沢ロフト / 株式会社鍛冶商店 /
株式会社東急ハンズ金沢店 / 株式会社木村硝子店 / 坪田 聡 / 51% 五割一分

Ip-0530「リトアニアへの旅の追憶」ポスター版下原稿(部分)
A picture for the poster of Reminiscence of a Journey to Liyhuania (detail)

［**展覧会**］

粟津潔、マクリヒロゲル4

「海と毛布―粟津潔の写真について」

会期 ‖ 2017年4月29日［土・祝］— 2017年7月23日［日］

会場 ‖ 金沢21世紀美術館　展示室12

主催 ‖ 金沢21世紀美術館［公益財団法人金沢芸術創造財団］

企画 ‖ 高橋律子（金沢21世紀美術館）

本展覧会は2017年度「コレクション展1」の一部として開催された。

[**Exhibition**]

Awazu Kiyoshi, Makurihirogeru (EXPOSE) 4

Sea and Blanket – The Photographs of Awazu Kiyoshi

Period: Saturday, April 29 – Sunday, July 23, 2017

Venue: Gallery 12, 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa

Organized by: 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa

Curator: TAKAHASHI Ritsuko (21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa)

This exhibition was held as a part of “Collection Exhibition 1” in 2017.

［**記録集**］

粟津潔、マクリヒロゲル4

「海と毛布－粟津潔の写真について」

編著 ‖ 高橋律子（金沢21世紀美術館）

翻訳 ‖ パメラ三木（裏表紙 , pp. 8-9, 12-13, 16-17）

ベンジャー桂（pp. 25-30）

デザイン ‖ 尾中俊介（Calamari Inc.）

展示風景撮影 ‖ 木奥惠三（pp. 1-7, 10-11, 14-15）

印刷 ‖ 大村印刷株式会社

発行日 ‖ 2018年3月31日

発行者 ‖ 金沢21世紀美術館

〒920-8509 石川県金沢市広坂1-2-1

[**Document**]

Awazu Kiyoshi, Makurihirogeru (EXPOSE) 4

Sea and Blanket – The Photographs of Awazu Kiyoshi

Text and edit: TAKAHASHI Ritsuko (21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa)

Translation: Pamela MIKI (back cover, pp. 8-9, 12-13, 16-17)

Kei BENGER (pp. 25-30)

Design: ONAKA Shunsuke (Calamari Inc.)

Photograph: KIOKU Keizo (pp. 1-7, 10-11, 14-15)

Printing: Omura Printing Co., Ltd.

Publication date: March 31, 2018

Published by: 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa

1-2-1 Hirosaka, Kanazawa, Ishikawa, 920-8509, Japan

ISBN: 978-4-903205-71-7

© AWAZU Yaeko and all the practioners appered in this book

© 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa

ュースのお知ら
木之本通
TEL（木之本

Photographs reproduce things. This reproduction, in the form of a negative, is projected on to photographic paper as a positive. Films are shot, as we call it, and in the same fashion, projected onto a screen. Sketching originally meant to copy while looking at a thing. Broadly speaking, drawing means the same.

Projecting something that has been reproduced, and reproducing a thing directly, are different in terms of the method and media employed, but do have commonalities.

Then there is tracing, which is reproducing as accurately as possible a picture someone has drawn perhaps, or a diagram. […].

Our present day is an age of duplicating and projecting, or copying and tracing, and the dualism of original and copy does not allow us to capture a thing as the object.

Most of my works have also been made by attempting to repeat the same method, the same expression, such as printing, or facsimile. My motto has always been "Re Reproduction"

To use some old-fashioned terms, its about "change and variation." Which apparently is using the same method or form of expression over and over again to spawn one element after another.

When designing, I don't do it very consciously, but that is the end result. In fact, it turns out that way unconsciously. And so perhaps, is more essential in nature.

For the "Osai and Gonza" poster illustration I traced parts of an erotic ukiyo-e print by Kunisada of the kind known as shunga, and keiboga (bedroom scenes). My job being "reproducing" I tried adding all sorts of colors to them, making a poster for "Osai and Gonza," a modern theater production of the Chikamatsu play. "Nigorie" was done simply by enlarging a hanafuda playing card, and started a series.

Awazu Kiyoshi "Reproduction"

Zokei Shiko Note (Thinking Eye), Kawade Shobo Shinsha, 1975